
義輝伝 幕府再興物語

坂川 一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

義輝伝 幕府再興物語

【Nコード】

N3239Y

【作者名】

坂川 一

【あらすじ】

半年以上溜め込んでいたものをこの機会に投稿し、連載してみようと思った次第であります。

義輝（男）として転生した主人公。時は戦国。リアル戦国無双をして華々しく散る気はない！うまく立ち回って幕府を再興してやるうではないか。とかいう話です。

これには転生、チート、主人公補正のご都合主義といったいわゆるテンプレが潜んでいます。ムリという方はリターンしてください。

其の一

それは悪夢か。

なにもない真っ暗な世界。

それは恐怖か。

自分が無に帰って行く。そんな感覚。

それは希望か。

暗闇の中に一つだけ、光が見えたのは。

俺にできたのはただ一つ。

光に向かって手を伸ばすことだけだった。

そして目が覚めた。

なんだかひどい悪夢を見た気がする。

寝汗びっしょりだぜまったく……体がおかしい？なんとゆ
ーか動かない。

そして確認してみる。

手が……間違いなく俺の手が……赤ちゃんになってる。

なんじゃこりゃあ！？まったく持って意味がわからんっーか、ど
こ、ここ？

いやまず落ち着こう。状況把握が先と見る。

まず俺の名前は……思い出せない！？why？名前すらわからないとはどーいうことでい。

俺は確か大学帰りに……。そう、車だ。車に跳ねられてそれで……。まさか俺死んだ？

よくある転生って奴ですか！？笑えんよ。卒業まであと少し、一流企業に内定をもらって順風満帆だったんだよ！やり直なんて望んでねーよ。神様のバカヤロー！！！！！！

「オギヤーオギヤー」

叫ぼうとしたが代わりに泣き声が出てしまった。
恨み言すらできないらしい。

「あらあらもう起きてしまったの義藤」

自分のことで精一杯だったため隣を気にしていなかった。
そしてそこにはびっくり美人なお姉ーさんがいた。

この女性が我が母君のようだ。つまり俺の名前は義藤というらしい。

「あら？すごい寝汗。それに熱もあるみたい。大変！」

それからはやわんやの大騒ぎだった。

侍女やら家臣やら医者やらが部屋を訪れては、義藤様、義藤様とうるさいのなんの。

「オギヤー……（熱があるんだから静かにしろ……）」

自身が置かれた状況を理解するのにそれから三年ほどの月日を必要とした。

そう、三年間俺は我慢してきたのだ。おっぱいや離乳食？的な超薄味の食べ物食べてすすくと育ったのだ。

はじめはあまりのまずさに戻しかけたが……

さてここまででわかったことをいくつか紹介しよう。

まず俺の名は足利義藤。そう『足利』だ。

そして俺がいるのは東山南禅寺。

殆どあったことはないが、父は室町幕府十二代將軍足利義晴とのこと。

母は慶寿院と呼ばれている。

不思議なことに乳母はいない。

以前母上にそのことを尋ねたらすごい目で見られたあげく、『お前は母が嫌いなのか！？』と泣かれてしまった。どうやら乳母という概念が存在しないらしい。

ここまできて俺は絶望した。

自分の正体を理解したからだ。

義藤と呼ばれていて気がつかなかったがこの家族構成を見る限りこのままいくと俺は足利義輝になってしまいそうだ。

足利義輝といえば剣聖將軍と名高いがそれ以上にその最期、すなわち松永久秀等の暗殺劇で華々しく散ったことのほうが有名だろう。つまりこれがタイムスリップであるのなら俺はいずれそうになってしまう可能性は高いのである。

冗談じゃない。せっかく生まれ変わったのにまた殺されてなるも

のか！

そのときから俺の目標は死亡フラグ回避。そして畿内平定となった。

とはいってもすぐにどうこうできるわけではない。今の俺は將軍のご子息ではあるが三歳児で、將軍家の力はほとんど無い傀儡政権であり、俺自身寺で暮らしているのだから。

当面はおとなしくして、信用できる家臣を選別することにしよう。いざというとき仲間が多いほうがいい。

そして父上には悪いが大いに矢面に立つてもらおう。プライドが妙に高い父上は権力に固執しやすいからな。うまく父上を言いくめて細川晴元とまずは和解してもらおう。

其の二

さて、義藤です。

五歳になりました。

報告です。

家臣ができました。

二つ年上の細川萬吉と善吉『姉妹』……………

うん、女の子だね……………義輝で細川といたらもう藤孝しかないじゃん！なんで双子姉妹！？

この世界おかしい！聞くところによると女性の戦国大名が多いらしい。というか有名どころはたいてい女性らしい。なんだそれ？謙信女性説なんてもんじゃないですね。女尊男卑ですか？というところではなくなんか性別の壁はあんまりないらしい。

それに明らかに未来の食事だろってのも時々出てくる。何でも南蛮渡来ですますんじゃないかねーよと言いたい。

まあ、そんなこんなで今は学問に勤しんでるわけだが、この時代、基本文書が漢文なのでどうなるかと心配したが、我が子供脳はスポンジが水を吸うかの如く新たな知識を吸収してくれるので割とすぐに覚えられた。

そのときは神童だのと騒がれて冷や汗ものだったけどな。

傀儡政権の次期將軍が神童って暗殺必至じゃね？って。

基本的に勉学以外にすることがないというのが実状だったり……………時々バカ親父がへまやって近江だかに連れてかれるけど、それはそれで楽しいからいいかなって。

萬吉たちが来たのはそんな退屈をもてあました頃だった。

正直嬉しかったよ。同年代の子なんていなかったし、誰を信じていいのかわからなかったし、暇だったし、カルチャーギャップという時代間ギャップで精神的にきつかったんだよ。

「義藤様。集中してください」

「ぬう・・・」

ボーとしていたら藤英から叱られてしまった。

つややかな黒髪に赤みがかった瞳。影のある雰囲気。黒い着物。

美少女であり、将来絶対美人になるであろう容姿なのだがいかにせん雰囲気があ・・・

地獄 女みたい。

歳は四つ上の九つで時々こうして勉学を教えてくれる、年が年なので基本だけだが。

五歳の子供に座って漢字練習させるなや！遊ばせろよ！教育学部からやり直せ！

と、内心反発するが怒ると怖いのでまじめに取り組む。

まあ、藤英も子供だし文句を言ってもしょうがないのだ。ここは俺が大人になろう。

そんなふう日々過ごしているのだが、このまじめに勉強しているということがまたすごいと家中で評判になっているのだ、子供って面倒だな・・・

「失礼します！義藤様ー羊羹を入手しました！」

「ま、萬吉だめだよ、そんなふうに乱暴に開けたら」

バン！力強く戸が開き二人の少女が顔を出した。

礼儀もへつたくれもない登場をかましたのは、細川萬吉。その後ろで申し訳なさそうにしているのが善吉。

ドタドタと部屋が一気に騒がしくなった。

「萬吉！羊羹羊羹」

俺は正座を解いて萬吉達の元へ向かう。

まるで羊羹に吸い寄せられるように…………と

「萬吉！善吉！」

藤英の一喝。

ビクッ！と俺を含めた三人が動きを止める。

「お、おねーさま…………」

「姉上…………いらしてたのですか」

「いらしてたのですか、じゃありません。今は義藤様のお勉強の時間です」

クッ！やはり藤英が最後の砦となるか。

九歳児にしてこの威圧感！ハンパねえ！

「ッ大丈夫だよ藤英。これ食べたら勉強するって。ほら、あまり詰め込みすぎるのも良くないでしょ」

「しかし慶寿院様からは最低でも二刻半は、と」

なにい！

愕然とする俺

二刻半！？どこの世界に五時間もぶっ通しで勉強する五歳児がいんだよ！？

母は俺を殺す気か？

「それはたぶん一日でってことじゃないかな？べつに休み無しってわけじゃないよね？」

「そうでしょうか？」

「そうだよ。ほら、萬吉たちがせっかく持ってきてくれたのに食べないわけにはいかないじゃん？藤英だって食べるでしょ？」

「姉上の分もありますから！」

「お姉様どうぞこちらに！」

入り口で縮こまっていた二人が慌てて話を合わせる。

うつ・・・と思案する藤英。

責任感と甘いものの誘惑がせめぎ合っているのだ。

はたして羊羹は起死回生の一手となるか!?

「わかりました。少しだけ休憩にします」

藤英は折れた。

甘味が勝ったのだ。

ぱあっ!と晴れ渡る青空のような笑顔になる俺たち。
やはり藤英も女の子。甘いものには勝てないのだ。
退屈すぎる勉強から逃れたこの喜び!

小学校の休み時間を思い出すね!

あの時は若かった……今のほうがずっと若いけど。

萬吉達もその喜びは変わらないようだ。

いや、今まさに叱責の対象になっていただけに、その恩赦は格別の喜びだろう。

ついさっきまでの二人の心境は、鬼監督に呼び出されたサッカー部員Aという感じではなからうか。

そしていざ行ってみたら、Aチーム昇格の話だった、というような喜び。

よく分からんか……

ニコニコしながら包みを開ける萬吉。隣でそれを眺める俺と善吉。

こういうとき包みというのは非常に厄介だ。

すぐに開けたいのになかなか開けることができない。

ましてそれは高貴な身分のものが食す高級菓子。包みもしっかりとしている上いかにも一流が描いたというような絵が描かれている。破ってしまうのは心許ない。

羊羹め、うまい具合に焦らしてくれる。

はやくはやくと萬吉にオーラを送る。

それを感じてしまったのか萬吉の包みの開け方が乱暴になってきた。

急いては事を仕損ずると言うが、これがまさしくその典型。

バリツという気持ちのいい音とともに包みが破れ、中の羊羹が飛び出してしまった。

「あっ」

「ふえ」

一体何が起こったのか。飛び出すだけでなく天井近くまで舞い上がった羊羹は、地球の引力に引かれて放物線を描いて落下する。

その場にいる全員が羊羹の軌跡を目で追う。
動くことなどできるはずもない。

そして――

べしゃ

藤英の黒髪の上に見事な着地を決めてしまった。

「あ」

「げっ」

息を呑む俺たち。

萬吉など紙を破いたときのまま目を見開いて硬直している。

藤英はうつむき、その表情は前髪に隠れて伺えない。

そして、藤英がゆらありと立ち上がった。マリオネットのような人形めいた動き。

「あわわわわわ」

「あ、姉上え」

今にも泣きそうな双子。

俺は恐怖のあまり動けない。

藤英はかくん、と首を右に傾ける。

赤みがかった左目だけが前髪から現れ何とも不気味。そして・・・

「いっぺん・・・・・・死んでみる？」

「ア——！！」

其の三

親父殿と晴元を言いくるめて和解させてからしばらく経った。

父たる十二代將軍に話を聞いてもらう機会はそう多くは無かった
ので苦労したが、晴元をこちらが利用してやりましようという感じ
で話を進めたら割りと早く事が進んだのだった。

晴元としても將軍との対立は避けたかった。そこに將軍側から和
解しようという話になったのだから飛びつくのは当たり前。

今はお互いがお互いを利用しあっているという状況になったのだ。

「脇が甘いッ!」

パン!という乾いた音が道場に響く。

ここは南禅寺に構えられた武道場。といっても大層なつくりでは
ない。なにせこの南禅寺は応仁の乱で伽藍が大焼失して以降再建が
思うように進んでいないのだ。

そんな南禅寺道場には今二人の人物が木刀を握り締めて向かい合
っている。

何を隠そうこの俺、足利義藤と剣聖・塚原ト伝である。

俺の知る歴史でも義輝が塚原ト伝から剣の指南を受けるという話
はあった。それが史実かどうかは別としてだ。そしていろいろと突
っ込みどころのある世界ではあるが俺が後の義輝である以上なんと
してでもト伝から剣を習っておきたかったのである。

そんな折、あの塚原ト伝が京に参られた！という噂が流れたのは天啓であろうか。

俺はすぐに藤英に頼み噂の真偽を確かめてもらった。

藤英の報告の結果はすぐに返ってきた。

どうやら俺のように噂を確かめようとしたものはいるらしく、その中にはもちろん腕に覚えのあるものが多数いた。

それらは件の人物に挑み、片っ端から討ち取られていったらしい。圧倒的な強さを持つ剣士。間違いなく塚原ト伝であろう。

俺は確認が取れてすぐ、晴元に頼み込んでト伝に引き合わせてもらったのだった。

なぜ晴元をとおしたかつて？政治中枢にいるのがヤツだからさ。

忌々しいことにな。

時を少し遡り、洛中。

天文法華の乱によって応仁の乱に迫る壊滅的打撃をつけた京は今懸命な復興の只中にあつた。

かつての活気を取り戻さんと、商人たちが商いに精を出している姿がそこかしこで見られる。が、それも少し中心から外れれば野ざらしになった死体が放置され、焼き払われ、打ち壊された家々が未だ数多く存在している。

そんな洛中を歩いて回るのは黒い長髪は後頭部の高い位置で纏めた女性。名を塚原ト伝といった。

「店主、団子を頂きたい」

「はいよ！」

威勢の良い声が店内から聞こえる。

ト伝は店先の長いすに腰掛け、団子に舌鼓を打つ。

手近な店に立ち寄ってみただけであつたが、ここの団子はかなりの一品だとト伝は思う。

「この店の団子は他と違うな。とても美味だ」

「！？・あ、ありがとうございます」

接客を行っている娘に率直な感想を送ってみる。が、声をかけられた娘のほうはひどく驚いている様子。礼を言うのがやっとであった。

それもそのはずでト伝はすっかり風景にとけこんでしまっていたのだ。気配を消すのではなく、周囲に同化させる。超一流の武人ならではの自然な絶技にト伝がここにいるということを失念していた彼女は突然声をかけられて吃驚したのだった。

「すまない、驚かせてしまったかな」

「あ、いえ。こちらこそ申し訳ありませんでした」

「いや、そうかしこまらずとも良い。ところでわたしは様々な国を渡り歩いてきたのがこのような美味しい団子は初めてでな。さすがは京の都と感激していたのだ。なにか工夫を凝らしているのかな」

「当方は創業百二十年になりますのが、歴史を胡坐をかかず、ほかの店に負けぬよう独自の工夫を凝らしております。それが創業者の

教えてください」

「ほう、それは良い心構えだ。初心忘るべからず。武芸にも通ずる基礎の中の基礎よ。ところがそれを実戦できるものが驚くほど少ない。あなたたちは大した者だ」

そついうと満足したのかト伝は金を支払って雑踏にまぎれていった。

「ここまで来ればもうよかるう」

人気の無い死臭漂う路地にやってきたト伝は独り言をつぶやいた。それは本当に独り言であったのだろうか。自分自身に言い聞かせるものであるのか、もしくは背後に現れた達に投げかけたものなのか……

「……塚原ト伝殿とお見受けするが如何に？」

影、より正確に言えば剣客というヤツか。四人の強面の男達は一様にト伝を睨み、そう問うてきた。

「如何にもわたしが塚原ト伝だが……なんのようかな？」

ト伝にこのように対峙するものは大きく分けて二通り。その見目麗しい外見に誘われて集まる下種と、剣豪の塚原ト伝と知って近づくものである。

「我等は貴殿に尋常の勝負を望む。剣を抜かれよ」

「ふむ、そう来たか。だがなあ、わたしにはやる気が無いのだよ。悪いが他をあたってはくれんか？」

「ふん。所詮は女子か。臆病風に吹かれて剣すら抜けんとは情けない。そのような者が剣聖などと持て囃されているのは気に食わぬ。ここで切り伏せてやるッ」

血気に逸る男達に対しト伝の士気は低い。相手の実力のほどはすでに見えている。例え四人がかりであつてもト伝に傷一つつけることは叶うまい。

まず一人目の男が剣を抜いて切りかかってくる。剣が抜かれている以上剣士として果し合いに応じねばなるまい。

「遅い・・・」

名乗りもせずに襲い掛かってきた男をト伝は刀の一刀をもって切り伏せた。他の三人にはいつ鞘から抜かれたのかも見えなかったに違いない。

「火遊びで死ぬ覚悟があるのならば、かかってくるがいい」

「クッ・・・」

ト伝の剣に恐れをなしたのかジリと後ずさる。

「このッ・・・囲め！なんとしても首を上げるぞー！」

男三人。取り囲めば勝機はあると踏んだのか、ト伝を取り囲む。

ト伝はそんな三人を蔑視の視線で牽制する。

この者たちは一対一で勝負する気概もないただの下郎である、と。

「へ、へへ・・・さすがに囲まれちまったらどうにもできねえだろ」

「命乞いするなら今だぜ、まあそのときはたつぷりと楽しませてもらうことになるだろうがなあ」

下卑た視線でト伝を見る男達。

「なるほど、剣を競おうとしたのは先の一人のみであつたか・・・あの者には悪いことをしたのかも知れんな・・・少なくともお前達と同じように見ていたのはわたしの失態だつた」

と、そこでト伝の身体が数十倍に膨れ上がった。

いや、そのようなことはありえない。単純にそう見えたというだけの話だが、ト伝の内から発せられた気がすでにこの戦場の趨勢すら決めていた。

「貴様等のような悪党を放置するわけにもいかん。ここで骸を晒すがいい」

そこから最早勝負ですらなかった。

鬼氣に当てられ満足に動けなくなった者を斬るだけの単純作業。

三太刀振るってそれで終わりだ。

「はあ・・・」

ト伝は何の感慨も無く四つの骸を眺める。

このところこのようなことが多い。自分には剣を振るうことしかできない。故にそれを極めんと武者修行に出た。

武者修行を始めたころはただ必死に剣を振るうだけだった。

それが気づいてみれば剣聖などと呼ばれている。尋常の勝負を挑んで来る者も多くなったが、どれも我が身に傷一つつけることのできない雑兵ばかり。最強を極めたト伝は剣を振るうということに虚無感すら抱いていたのだ。

「その武技・・・さすがは名にし負う剣聖・塚原ト伝殿」

「さきほどから私を見ていたのはあなたか」

突然かけられた声にも驚くことなく、初めから予期していたというト伝。

ト伝の見つめる先、物陰から姿を現したのは艶やかな黒く長い髪を持つ少女だった

「お初にお目にかかります。三淵藤英と申します」

深々と頭をたれる藤英にト伝は目を細める。

警戒していると言われればそうであろう。この藤英。見たところ元服も済ませているかいけないかといった歳だ。それが血の海に沈む肉塊に臆することなくこの惨劇を作り出した本人に対峙している。

おまけに図太いわけでなく、深い教養を感じさせる所作に、おそらく何かしらの武芸の心得があるを見る。

「して、このわたしに何用かな」

「はい、こちらをご覧ください」

藤英が渡したのは一通の書状。それを受け取ってト伝は目を見開いた。

細川晴元の花押ッ！？

室町幕府の管領細川晴元。幕府権力を一手に引き受ける人物からの書状であった。

「足利義藤様の剣術指南役・・・このわたしが」

「はい、お引き受けくださいますよう・・・」

しばしト伝は考える。この話を断ることはできる、がそのあと京にいることはできないだろう。

京に未練はないが、少々流浪の生活も飽いたころあいだった。噂の神童、足利義藤。ぜひ見てみたい。

「分かりました。この話お引き受けいたします」

これが冒頭に至るまでの経緯である。

其の四

塚原ト伝が剣術指南役として南禅寺にやってきて早二ヶ月が過ぎた。

神童とまでよばれる足利義藤の人となりを見極めんとここまですって来た。学問はできても剣術はまた別であるし、將軍家のものでもあるといつて礼節を欠くようならすぐにでもこの役目を辞す腹積もりであつた。それが二ヶ月続いているのはト伝自身が義藤を弟子と認めたからに他ならない。

（それにしても）

眼前、仰向けに倒れ付した少年を見ながらト伝は思う。

（本当にたいしたヤツだ）

この日、すでに稽古は休みを挟んではいるが三刻になろうかとしている。本来は過剰な運動量として切り上げるべきである。が、

「よし、次行きましょう、師匠」

「まだやるのか？今日はもう切り上げるべきだと思うが」

「大丈夫です」

齡10に満たない義藤は木刀を構え、真っ直ぐにト伝を見つめている。初めは覚束なかった構えも今では堂に入っている。

（本来は遊びに甘味にと言つてゐる歳だろうに）

ト伝は今まで一度も義藤から弱音を聞いたことがない。見た目にそぐわず精神面が大人なのだ。二つ年上という彼の側近のほうの子どもらしいとも言える。

「ゼエエエエー！」

義藤の打ち込みを難なく防ぎ、返す刀で脳天を打つ。

「うおつとッ」

それを義藤は身を捻ってかわした。

（これだ・・・この動き）

義藤との稽古を始めて真っ先に驚いたのがその運動神経と目の良さだ。まったくの素人が試しに振るった自分の剣筋を確かに目で追っていた。

尋常ではないのだ。それは。

もしかしたらとんでもない大物になるかもしれない。そう思ったがために、ト伝は義藤の弟子入りを認めざるを得なかったのだ。

困ったことに俺はまだ師匠から一本も取れていない。

それでも、成長はしてるんだぞ。剣につき込める時間は全てつき込み、もとが義輝だから飲み込みも早かった。それは師匠すら驚愕させるほどだったらしく。

『お前の才が恐ろしいな』

とまで言われてしまった。

この二ヶ月で基礎を修得、さらにその先まで到達しそうな勢いである。それでも

「だああああッ！！」

「まだまだ」

「くう・・・」

俺はひりつく額を摩りながら恨みがましく師匠を見る。

その師匠は俺の視線など物ともせず涼しげな顔で立っている。

「もう一度お願いしますッ」

「その気合はいいのだがな」

やれやれといった様子で師匠が言葉を発した。木刀を肩に担ぎ、構えを解いている。

「なあ義藤。お前は何故そうまでして剣に拘る。次期將軍の立場ならもっといい思いができるはずだろう。わたしにはお前が焦っているようにしか見えん」

「む」

言われて俺は押し黙る。確かに俺は焦っている。このまま行けば俺は暗殺されるという運命にあるのだ。身を守るための力は必要不可欠。

なにより、平和な時代に生まれたときの記憶が俺にこの時代を否定させていた。人死にが許容され得る時代は断じて認められない。かといって俺にできることはほとんどない。だから俺は今できることに全力を尽くしているのだ。

「生き急ぐやつは大抵志半ばで死んでいく。今の世はそういう時代だ……特にお前のような立場の人間はな」

精悍な師匠の顔にうつすらと陰りが見える。

諸国を渡り歩いてきた彼女はおそらくそういう場面を数多く見てきたのだろう。中には師匠自身の弟子もいたかもしれない。

「お前はもう少し自分のことを大切にしたいほうがいい」

「……そうは言われても、俺にはやらなければいけないことがあります」

この家に生まれた責任。自分の運命。それを知るが故に、引けない。

「……はあ……わかったよ」

と、俺に近づいてきた師匠が担いでいた木刀を俺の頸に押し当ててきた。

「足利義藤討ち取ったり、だ」

「それは卑怯ではないですか」

「卑怯なものか、お前の立場は常にこれだぞ」

「ッ！」

そう、これがもし真剣であつたなら、それ以前に師匠が刺客であつたなら、俺はここで終わっていた。この時代將軍家だから血を流さないなんて事はないのだ。気の休まるときなどそうそうない。知っていたはずだ。いや、知っていたつもりになつただけかもしれない。それを堂々と指摘してくるのは流石塚原ト伝と言つたところか。

師匠は剣を引くと、俺に背を向けて数歩離れた。

「構えろ」

「はい」

木刀を握り、構える。視線の先にいる師匠の構えは恐ろしく優美であり無骨。一部の隙もなく、それでいて自然。

「お前がその歳で確りとした考えを持っているのは分かっている。それが危険なものであるということも。だが、ただの剣術指南役のわたしはどうか言えた立場じゃない……だからお前に可能な限りわたしの剣を教えてやる。つまらんことで死なないくらいに……鍛えて上げてやる」

師匠から溢れるナニ力が俺を打ち据える。気……というヤツだろうか。向こうの世界では創作に見るだけで終ぞ体験することの

なかったそれが、この空間に満ち満ちている。
たまらず、全身から汗が噴出す。

「剣を振るうのは人を斬るということだ」

「それは当たり前のことです」

踏み込んできた師匠の振り下ろしを顔面すれすれで防ぐ。当然筋力の差があるため鏝迫り合いにはしない。後ろに飛んで勢いを逃す。

「その当たり前をきちんと理解している者は多くない。剣とは人を守り、導く指針であると同時に畜生の牙であり、爪である」

「ぐッ」

確かにその通りだ。

言ってみれば剣とは力の象徴であり、そこに善悪は関与しない。それ故にそれを振るう者は心身を清く保たねばならないのだ。

「だからこそ剣を振るう者には、ただそれだけで大きな責任が課せられるのだ」

「……それを承知した上で、剣を学んでいます」

「それは解った気になっているだけだろうよ……」

それはそうなのだろう。実際俺はまだ一度も人の死に直面していないのだから。

俺は師匠の数合の打ち込みを何とか凌ぎきり、仕切りなおしに持ち込んだ。

「『天の時』『地の利』『人の和』があれば、一撃必殺の剣『一之太刀』を繰り出すことができる」

「？」

「ふっ・・・我が必殺剣のことさ」

天の時、地の利、人の和・・・確か孟子にそのような一説があった気がする。天の時は地の利に如かず。地の利は人の和に如かず。という一説だ。

天の与える好機も土地の有利な条件には及ばず、土地の有利な条件も民心の和合には及ばない。
剣と関係があるのだろうか。

「深く考えることは、ないさッ!!」

「うあ!!」

さっきよりも幾分か速い打ち込み。受け止めることができたのは狙いが甘かったからだ。そして、今師匠の剣は俺に弾かれている。俺は体制が整っていて反撃できる。

俺はこの二ヶ月ではじめて勝機を見出した。

「隙ありいい!!」

俺の全力の一撃は、師匠の頭部に向かって繰り出された。絶対に避けることはできないだろう完璧なタイミング。

そう思った矢先、信じられないことに、茶色い刃は虚空を切り、俺は地に伏せていた。

「これが『わたしの』一之太刀だ。一之太刀つてのはな、ようは一撃で相手を倒すことさえできればそれでいいんだ。自分にとって最も相性のいい技を磨き上げて必殺にまで高めたもの、それが一之太刀」

だから教えられる技じゃないんだよ。悪びれもせずそう言う師匠の言葉を俺は意識の端で聞いた。

其の五

毎度おなじみ義藤だ。

師匠こと塚原ト伝から剣術を習って二年ほどが経つ。師匠からは剣術以外にも心の持ちようみたいな、なんというか人としての基本みたいなことも教わった。そんな師匠だが、今は流浪の旅に出てしまっていてすでに京にはいない。できることならこのままここに残り、わが軍の一角を成して欲しかった。

もちろん師匠が旅立ってから修行を怠ることはしていない。

それ以外にすることがなかったということもある。

繰り返す日々を学問と剣術に注ぎ込みながら、出来得る範囲で情報収集も行った。

藤英や幽斎、藤孝のように私心なく仕えてくれる家臣をもてたことは僥倖だった。

彼女達のおかげで俺は京を含め近畿一帯の政情を大まかながら把握することができていたのだ。

最近では細川高国派の残党等の散発的な蜂起に一向一揆が重なって、その始末に晴元は手を焼いているらしい。

ちなみに細川高国というのは晴元のに敗れて自害した前管領のことであり、一向一揆が活発になっているのも元を辿れば晴元のヤツが彼等を利用したからに他ならない。

自業自得というヤツだな。

かといってザマーネエナアッ！とかいっている場合ではない。これらの事件は畢竟、室町幕府の権威失墜に繋がっているわけで、しわ寄せは無論俺に来る。

どこまでも迷惑なヤツだ……

さらに、調べていく中で分かったことだが、どうにも晴元を追いつ落としたからといって俺の力が高まるかといえばそうでもないらしい。

敵は他にもいるのだ。

例えば、伊勢貞孝という人物。

幕府の財政を担う、政所における長官である執事の職についているコイツはやはりというべきか晴元と癒着しているらしく、人柄も横柄で図々しく周囲から煙たがられているようだ。

これを排除しなければ財政は握られたままとなる。

このほか、香西元成、三好政長、茨木長隆、木沢長政のような晴元派の武將たちが幕府内で幅を利かせているし、晴元を敵視している細川氏綱もいる。

とくに氏綱は管領の立場を狙っているし、それは幕府再興とかいう立派な目的ではなく、自己利益のためである事は明白である。

管領になり得る立場の氏綱は細川政権にとって目の上の瘤であるのは間違いない。

と、こんなふうに関わりを取り巻く環境は火薬庫のように危険なものになっているのであった。

ああ、ちなみに萬吉が藤孝で善吉が幽斎な。あいつ等この前、少し早いけど元服済ませたんだよ。そんときに名前変えたの。幽斎は姉妹の中で自分だけ『藤』の字がないことに不服そうだったが、そ

うそう偏諱を連発するわけにもいかないから我慢してもらった。
何れ他の事で働きに報いてやらないとな。

ヒュン！！

白刃が舞い、数瞬も経たず鞘に収まる。

俺の生前の世界で

- - - - - 居合い

と呼ばれた技術だ。本来この時代には存在していないが、俺はこの最速の斬撃を『俺の一之太刀』にすべく独自に修行を行っている。

「・・・ダメだな」

つついそう漏らしてしまう。

どうしたものか・・・もともと実践で使えるのか疑問視される技であるし、大道芸だからか。必殺になれる気がしない。

これでも相等な速度で抜打ちできるのだからなあ・・・
並みの兵卒なら剣を振り上げた瞬間に頸を刎ねる自信がある。まだしたことないけど。

それでも師匠の必殺に比べればまだまだ脆弱と言わざるを得ない。

足元に散らばる落ち葉に目を見遣る。

断ち切られているのは俺の修行で斬った紅葉たち。

ここ、晴元邸の紅葉も鮮やかに色づく、そんな季節の夕焼けが俺の世界を紅く染め上げる。

「はあ、ちよつと休憩するか」

俺は縁側に腰掛け煮詰まった頭と疲れた身体を休ませることにした。

遠くから大人たちの笑い声が薄らと聞こえてくるのは、この家主である細川晴元が主催する宴会が盛況である証だろうな。

父上をはじめとする重臣達と、公家を招待した大規模なもので、先の一揆を鎮圧した戦勝祝いだとか何とか・・・

俺は挨拶を済ませて、公家等に顔を覚えてもらってから席をはずしたのだ。派手派手なのは好みじゃない。こうして一人で空でも眺めていたほうが風流でいい。落ち着く。

「小倉山 峰のもみぢ葉ころあはば 今ひとたびの御幸待たなむ」

藤原忠平の歌だ。

和歌など趣味ではないが、日々学問に励んでいるおかげで、ある程度諳んじるところまで来ている。すごいだろ。でもこれできないと公家に取り入れられないんだよね。

あと和歌出来ると一目置かれるようになる。とくにこの京ではそれが顕著だ。

「ん？」

不意に、人の気配を感じた。

誰か知らないがこちらを伺っている者がいるようだな。

「そこにいるのは誰だ？」

木々の只中。ちょうど大きな松が植えられている所に確かに人の

心配がする。

こう見えて視線には鋭いぞ、俺は。

松の太木、その奥を見据えながら、刀に手をかける。もし相手が賊徒の類ならすぐに応戦せねばならない。

「・・・申し訳ありません」

返答を期待していなかったために、あっさりと出て来たのは少々意外で呆気にとられてしまった。

太木の陰から現れたのは絹のような艶やかな黒髪を持つ、少女だった。

――身勝手なッ！！

身のうちに溜め込む怒気を必死に押さえ込みながら、長慶は思う。怒りの矛先は父の敵であり、主君の細川晴元、そして三好政長。延いては力ない我が身に向けられている。

政長は長慶の父、元長と仲が悪く晴元の讒言して一向一揆を煽動し、謀殺したのだ。それがどれほど無念であっただろうか。

あまつさえ自ら起こした一揆が抑えきれないからといって元服したばかりの長慶を呼び寄せて鎮圧に当たらせている。

しかも晴元はそれをまるで自分の手柄のように扱っているのだ。

この晴元邸でのバカ騒ぎも長慶の憎悪の念を膨れ上がらせるだけの増幅器でしかなかった。

（修羅に堕ちることができれば、気兼ねすることなくヤツを殺せるのにッ）

生憎と長慶には感情に任せて動けるほどの自由はなかった。

自らに何かあれば、三好の家はどうなる。父の血を引くものは間違ひなく討たれることになる。十河家に入った一在も運命を同じくするだろう。故に動けない。晴元の配下に甘んじるしかないのだった。

「晴元様、わたしはこれにて失礼いたします」

「長慶か・・・うむ、ご苦勞であつた。下つて良いぞ」

我慢が限界に達する前に、長慶は宴会場を後にすることにした。

「お体の具合が悪うございますか？」

「ああ、いや・・・なんでもない。心配をかけたな」

外に出てすぐ、侍女が声をかけてきた。阿波にいたところから仕えてくれているために事情を知っている。心に巣くう激情を察したのだろうか。

「あまり無茶をしないでくださいませ」

「分かっている。今大事あつては何も出来なくなるからな・・・」

しばらく一人にさせてくれ」

「分かりました。わたくしはここでお待ちしております。日が沈む前にはお戻りください」

長慶は晴元邸の庭を歩きながら、色づく木々を見て回る。

そうしながら深呼吸を繰り返して怒りを沈めていく。決して消えることのない怒りは心のうちの奥深くに降り積もり、幼い心を少しずつ、少しずつ蝕んでいる。

（これほど綺麗な紅葉ですら、あの晴元のものだと思つと憎らしく思えるものなのか）

己の中の鬼がそれほど大きくなっているのだと気が付いて呆れを通り越して自嘲する。

そんな折だった。

- - - - - ヒュン - - - - -
- - - - -

何かが大気を切り裂く音が聞こえる。

何か、ではない。間違いなく今のは刀を振るつた時の音。

- - - - - 敵か - - - - -
- - - - -

晴元を憎むのは何も自分一人ではない。誰かが刺客を送り込んできた可能性もないわけではない。晴元がどうなるうと知ったことではないが、自分に飛び火するのは避けたいところ。

（誰が剣を振るっているのか、それだけでも確かめておこう）

そう思うと長慶は音がするほうへ向かっていった。

幸いにして手近に植えられていた松の幹は長慶を隠すには十分すぎた。

気の裏に隠れ、様子を伺ってみる。

視線の先にいるのは一人の少年だった。自分と同じか少し下くらいだろうか。

晴元の屋敷にいるということは晴元の家臣の子息か何かだろう。刀を鞘に納めたまま、ただそこに立ち尽くしている。

（一体何をしているんだろう・・・）

そのとき、少年の頭上から一枚の紅葉がはらりと落ちてきた。

「ッ!？」

一瞬の出来事だった。

紅葉が落ちてくるや少年は刀を抜き放ち、その勢いのまま振りぬいた。中空を漂う紅の葉はその中心から二つに割られて風に乗って流れていく。

そして気が付けば、すでに刃は鞘の中に納まっている。

（抜刀したまま敵を斬る・・・そんな技は聞いたことがない）

おまけにその速度。まさしく電光石火の如し。

その後も何度か抜刀を繰り返し、加えて舞うように刀を振るう。

（なんて、美しい剣・・・）

長慶は時を忘れ、言葉を失って、その刀捌きに魅入っていた。
少年が刀を一振りすることに、胸のうちの雑念が切り払われていくようにすら思えた。

今の長慶にとってあの剣舞は『破魔の剣舞』といっても過言ではなかったのだ。

少年は休息をとるためか縁側に腰掛け、和歌を口ずさんでいる。
武だけでなく教養もあるようだ。
そんな中、突然少年と目があつた――――――気がした。

「そこにいるのは誰だ？」

間違いではなかった。確かに気づかれている。

（でも、どうやって）

驚愕を押し殺している間に、少年が刀の柄に手をかけている。
それはまずい。

賊とも思われたか。誤解を持たせたまままで斬り合いになれば数合と持たずに切り伏せられることは自明の理。

「・・・申し訳ありません」

長慶はすぐに姿を現して誤解を解く方向で動き出した。

其の六

「申し訳ありません」

現れたのは幼さの抜けきらない少女だった。

黄金色の瞳と肩口までの黒い髪。年のころは俺と同じか少し上と
いったところだろうか。

こんな女の子に刀を向けようとしていたのか、と思って俺は少し
申し訳なくなってしまった。

「えーと、君は？」

ここは晴元のお屋敷だ。防備はちょっとした城並みであり、出入
り口にもちゃんと衛兵が立っている。簡単に潜り込むことはできな
いし、迷い込むなどありえない。

とすると、彼女は今日ここに集まった諸将の親族だろうか。帯刀
しているから武家なんだろうケド。

「はい、わたしは三好長慶と申します。もしよろしければお名前を
伺っても？」

・・・・・・・・・・・・・・・・なん、だとッ

「・・・ごめん、もう一度名前聞いても？」

「はあ・・・三好長慶と申します」

ナガヨシ！？

どどどどという、ことだ！三好長慶！？俺のブラックリストN

0・1に位置するはずの天敵だというのは!?この女の子がッ!?

それがどうしてここに?

いや、まてよ・・・そういえば風の噂でそんなことも・・・晴元の家臣だったな。そうか、じゃあここにいるのも納得、なのか?

「どうかなさいましたか?」

うおッ。

かわいい。

心配そうに眺めてくるところが。

いや、落ち着け、俺。俺はロリじゃない。年上な感じがいいんだッ!!喝!!

「ナ、ナンデモナイヨ」

「はあ・・・」

しまった。少し上ずってしまったか。

何はともあれ人付き合いは最初が肝心。ここは堂々と己の名を名乗ろうか。

内心の動揺を押し隠して、俺は背筋を張って名乗った。

「俺は足利義藤だ。以後よろしく」

ニカッと極めてフレンドリーに笑ってみせる。

どうよ、この会心の笑顔のだけは。

俺の笑顔は広く宮廷にすら轟くのだ。

ここから長慶とつまいこと話して、つながりを作っておこう。長

慶が味方になってくれるのなら最大の懸念が取り除けるかもしれない。

かもしれない、というのはあくまでも長慶は危険勢力の一つではないからだ。

「……………おい、どうかしたか？」

今度は長慶が固まっている。

俺に声をかけられてビクツとなったたん、その場で頭を下げてきた。

「申し訳ありませんでした！義藤様とは露知らず度重なるご無礼をッ」

「無礼とか、別に気にしてないからッ！顔上げてくれッ！」

この立場になっただけいぶん経つとはいえ、なかなかそういうのは慣れていない。

一部の隙もない完全謝罪にはこちらが圧倒されてしまう。

生前は土下座なんて見る機会なかった……いや、まああるにはあるが、されたことはなかったからな。

「それはもう置いておいて、だ。こんなところで何をしていたんだ、長慶は」

「あ……それは」

「？」

「……………紅葉を見て回っていました」

ふむ、嘘は言っていないようだが、何故に視線を逸らす。

「木の陰で俺の事を見ていたのは？」

「それは、その・・・申し訳ありませんでした。義藤様の剣に見惚れてしましまして・・・」

見惚れてって・・・

「いや、そんなにすごいことか？まだまだ未熟だし、見苦しいくらいだと思ってたんだけど」

師匠に満足に勝つことなく修行期間は終わったからな。

まだ、目標には届いていない・・・のだが、

「そんなことはありません！義藤様の剣は素晴らしいです！！」

拳を握り締めた長慶に否定された。

「わたしは、義藤様の剣に救いを感じたのです。心のうちに巣食う邪なる鬼を一刀の元に切り伏せていただいたかのようなッ」

鬼って。表現がすごいな。

晴元のところに居るのがそんなに辛いのか。まあしかたないか。親の仇だしな。

長慶と晴元の確執は父の代にまで遡る。

元々、長慶の父、三好元長は晴元政権の下で重臣として活躍していた。武将としての力には目を見張るものがあり、俺の父、義晴と

細川高国の連合軍を桂川原の戦いで打ち破るという戦果を挙げている。官軍を追い落とすという、決して誉められたものではないとはいえ、その武勲は確かだ。

当然、晴元政権が安定化するにつれて突出した力を持つ元長は主君との対立の末に、一向一揆と結んだ晴元によって討ち取られてしまっているのである。

数々の戦でその武技を見せしめた傑物の呆気ない最期であった。そして、その娘長慶は阿波で逼塞、今はこうして親の仇のもとで唯々諸々と従う日々を送っている。

「そうか、やっぱり大変なんだな」

「いえ、大変などとは・・・」

それから少し、会話が途絶えた。
お互いべらべらとムダ話の興じる性格ではない、ということだろう。その点、晴元たちがいつまでも騒いでいられるのが不思議でない。むしろ羨ましいくらいだ。

「長慶は、もう戦に出てるんだよな」

不意に、そのことに行き着いた。
自分よりも少し年上であろうとも、生前の世界における中学生くらいであるのは間違いない。いくら能力があるとはいえ、少し早すぎる嫌いがある。

「長慶の軍は五百の手勢で敵兵二十の首級を獲ったとか。軍神もかくやという働きだったも聞いている」

「は。しかしそれはわたし一人の功ではなく、家臣の者たちが奮戦

した賜物であります」

「謙虚だな。だけど、そんな長慶だからこそ、みんなが付いて来るんだと思うよ」

「あり難き幸せにございます」

長慶の将としての才覚はもはや父のそれを凌駕している。間違はなく、晴元に対抗できるだけの勢力を築く力を持っているのだと、この問答だけで実感した。

だからこそ、尋ねておきたいことがある。

「なあ、長慶・・・この国をどう思う？」

「は？」

予期していない問いだったのか、長慶は少し戸惑った表情を見せ、そして意を決したのかゆつくりと、しかしながら確りとした口調で語りだした。

「・・・怖れながら、日ノ本は今、内に巢食う病魔に犯されているようなもの。このままでは遠からず、最悪の事態を招くものと」

そこで言葉を切る長慶。

おそらく俺の様子を伺っているのだろう。

実権がないとはいえ、將軍の息子に対するある種の国政批判だ。下手を打てば無礼討ちになりかねない。

つまり長慶はそれを覚悟した上で意見を述べたのだ。

それを考えると、ますます晴元の家臣に甘んじているのがもったいなく思えてくる。

諫言できる家臣は総じて忠臣たりえるのだ。

「・・・なるほど、たしかにその通りだ。この国は乱れきっている。民たちが明日すら見えぬ世を嘆くのも道理だろうな」

だから宗教が幅を利かせているとも言える。

長慶もはい、と答える。

「俺は將軍家の人間だ。なのに、今の俺には何もすることができない。本来ならば俺たちが率先して事に当たらなければならぬのにッ」

言葉に出して、改めて不甲斐なさを思い知った気がした。

知らず知らず、生きていればいいという思いは失せていた。自分でも信じられないことだが、今の俺には足利義藤としての確たる願いがある。

「俺には夢がある。日ノ本を再び一つにし、天下に然るべき法と秩序をもたらすという大望がな」

「義藤、様」

「だから長慶。君さえよければ、そのときに俺の力になってほしい」

「ッ！・・・わたしのような者でよろしければ、いつでも御身のお力になりまする」

さあ、と冷たい秋風が俺と長慶の間を颯爽と駆け抜けていった。

「姉上、どうかしたか？」

その夜、なんとなく物憂げな長慶に、一存が尋ねた。

「ど、どうもしてないぞ」

「?・・・ならいいんだが」

釈然としない様子ながら長慶にそう言われては引き下がるほかない。

「義藤様・・・願わくばこの力、あなた様のために」

その呟きは月を頂く夜闇に吸い込まれていった。

其の六（後書き）

長慶の読みに関して。

個人的にチヨウケイよりもナガヨシのほうが好きなのでここではそのようにします。

其の七

冬は、つとめて。雪の降りたるはいふべきにもあらず。霜のいと白きも、またさらでも、いと寒きに、火など急ぎ熾して、炭もて渡るも、いとつきづきし。昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶の火も、白き灰がちになりて、わるし。by 清少納言

枕草子の一節であり、誰もが知っている春は曙の冬verだ。冬というのは早朝が一番趣があり、とても寒いが、だからこそ炭をもって走り回るのも似つかわしいというものだ、的な内容だ。四季の移り変わりをしみじみと描いた歴史的名著である。

が、言いたいことは多々ある。

まずはそうだな……

つとめて（早朝）じゃねえええええッ！！

「あのー義藤様、そろそろ御起床のお時間なのですが」

「大丈夫だ、俺は起きている。だから何も心配することはない」

俺は襖の奥から声をかけてきた幽斎に、布団に潜ったままはつきりと告げる。

季節は冬。

庭は見事なまでに雪化粧。白く染めあげられている。

京都の冬は寒い。冷気が籠るといitうか底冷えするというのか。早朝とか何言ってるのって感じなんだけど。起きるわけないでしょ寒いのに。

生前は冬って割と好きなんだよね〜とか言っていたが、それはコタツとかストーブとかヒートテックとか文明の利器があったからで、火桶だけとか暖まるのにどれだけ時間のかかることか。まして冷え込む早朝に動き出したいと思う者があるうか、いや、ない。（反語）

「でも、義藤様ー」

「いいか幽斎。俺はこの一畳の浄土から出たくないんだッ」

デモもストもなければ一揆もない。だって冬だもん。戦だって控える時期であるし、当然俺がしなければならぬような用件だってないはずである。軟弱未来っ子の俺には京の冬は堪えるのだ。

「もうすぐ姉上が来てしまいます」

「なんッ」

だとッ！絶句した瞬間、朝の冷気を肺腑の奥深くまで吸い込んで一瞬息が止まった。

幽斎の言う姉上とは三淵藤英のことだ。

幽斎と藤孝の異母姉であり、父であり和泉国松崎城と山城国大宝寺城の城主の三淵晴員の跡目を継ぐ人物だ。幽斎と藤孝は晴員の兄、細川元常に養子に出されていたのだ。

元常は和泉半国守護で、山城国勝龍寺城城主なので将来的にはどちらかに守護職、どちらかに城を継がせるのかなと思っていたりする。

話がそれた。

そんな複雑な家庭に生まれた藤英は文武に秀でており、母上から俺の教育係りに指名されている。まあ実質教育係を言うよりは、一世を風靡した大河ドラマ、天地人の景勝と兼続みたいな感じなわけだが。

では、なぜ俺は藤英の名を聞いて絶句したのかといえば、彼女が超生真面目であるということに尽きる。

己が職務を全うせんとするその意気や良し。だが母上の冗談を真に受けての無茶振りは勘弁して欲しいところだった。

「義藤様」

そんな風に考えていると、俺の名をばそぼそとしたハスキーボイスが呼んだ。

間違いなく、藤英だ。

「お稽古の時間でございます」

「今日という今日は、俺はここから出ないッ」

「梅が枝にふりつむ雪はひととせに 二度咲ける花かとぞみる、という歌もあります。例え寒くとも、心の持ちよう一つで如何様にもなります」

和歌で説得するな。幽斎と藤孝には通用しても俺には無意味ぞ！

「ト伝殿から剣の教えを受けたのではありませんか。寒さくらい何とでもなりましょう」

「寒さは刀では斬れん。故に俺は、ここで籠城するッ」

「義藤様、兵糧も後詰もなくては勝機はありませんよ。開城してください」

ナイスノリだ、幽斎。

「だが断るッ!!」

「そんなあゝ」

襖の奥で幽斎があわあわしているのが目に浮かぶようだ。
しかし、肝心の藤英は全く動じていないらしい。

「はあ、仕方ありません。義藤様、失礼いたします」

そう言い放つと、一気に襖を開けて侵入してきた。
バカ、ナ・・・

易々と城門を抜けた藤英は数歩で俺を見下ろせる位置にまでやって来た。

「さすがに寝所に強制侵入というのは、すこしやり過ぎじゃないか」

「慶寿院様から許可を頂いております」

母よ、なんぞ俺を見捨てたもつや。

「義藤様、お覚悟」

「や、やめ・・・あああああッ!!」

その場で布団を引き剥がされた俺は、藤英に抱えられるように外に連れ出された。

後ろで幽斎が

「義藤様を抱えるなんて・・・なんて羨ましいッ」

なにやら戦慄していた。

本日は快晴。雲ひとつない青空が広がり、天高く上る太陽から降り注ぐ光が純白の雪を金剛石の如く輝かせている。

寒さが研ぎ澄まされた刃のように俺の肌を斬りつけている。

キイイイン・・・

清澄な空気を揺らす高い音。

「おお、すごい」

俺は感嘆の声を漏らす。

音の正体は幽斎の放った弓矢だった。

遠く60mほど先の的の真ん中に綺麗に突き刺さっている。

「義藤様、わたしも、わたしも当てました!!」

「ああ、藤孝もすごかったぞ」

そう言つと藤孝はうれしそうににんまりとしていた。

細川幽斎と言えば、古今伝授を受けたことで有名だが、その実武芸にも秀でている。それはこの世界でも変わらない。幽斎、藤孝ともにト伝師匠から剣を指南されているし、武田流と呼ばれる弓術、馬術、礼法からなる弓馬軍礼故実の流派を修めている。

つまりなんでもできるのだ。

「義藤様のお相手はこちらです」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

できるなら、このまま幽斎たちを眺めていたかった。

俺の手元にあるのは普通の木刀。藤英が用意したものだ。

そして、藤英の手元にあるのは木刀、ではなく角材。のように見えなくもないゴツゴツとした丸太。ではなくゴン太の槍。

もちろん穂先は突いていないのでただの棒だが。

槍というのは人を突くものであって、鐘を突くようなものは槍とは言わないはずだ。

「それを、使うのか？」

「はい」

藤英は苦もなく棒を振り回し、肩に担いだ。

どんなだよ。無双じゃねーか。

「仕方ない、か」

藤英は本気でアレを使って稽古するつもりのようなだ。
下手をすれば死ぬ。俺が。

だから俺はふざけた気持ち切り替えて仁王の如く立つ藤英に對峙するしかなかったのであつた。

其の七（後書き）

pixivに初代光秀担当のみつるぎあおい氏の光秀絵が載ってた。画風が変わっていたがそれ以上に服ッ！光秀が性格すら変わってしまったかのようだった。

つか、光秀って1からキャラデザほとんど変わってない・

其の八

南近江国観音寺城。

ほのかに光が差し込む六畳ほどの小部屋に三人の人影。

室内には物がほとんど置かれていらず、数少ない調度品も主の気性を慮ってか空気に溶けこむ様にして身を潜めている。

「よ、ようこそお越しくできました。義藤様、藤孝殿」

「久しぶり、義賢」

「義賢殿、お久しゅうございます」

おどおどと俺たちを迎えた小柄な少女こそ、近江守護にして管領代の六角定頼の娘、義賢である。

久しぶり、と言っているので分かんと思うが、彼女と俺たちは初対面ではない。父・義晴は事あるごとに近江に逃亡していて、それに付き従っていた俺は必然的に義賢と顔を合わせる機会が多かったのだ。

そもそも六角氏は鎌倉時代から南近江に守護として勢力を持っていたが、室町時代に入ってから、領内に比叡山を抱えるなど、その支配はなかなか安定したものではなかった。

しかし、現当主の定頼が現れてからは、その卓越した内政手腕と軍事力によって一気に戦国大名にまで申し上がり、六角家は全盛期を迎えつつあるのだった。

父を將軍に擁立した人物でもあり、室町幕府の後ろ盾の大名であ

る。

そのため、俺としても六角と仲を違えたくはなく、今回のように父が六角を尋ねるときは決まって随行するようにしているのだ。

そんな六角に不安要素があるかと言えば、残念ながらあるのだ。

それは - - - - -

「なあ、義賢。たまには外に出て遊んだりはしないのか？」

「いやですう・・・お外は怖いんですよ」

これである。

なんと六角の次代を担うべき義賢は超がつくほどの出不精なのであった。めんどくさがって出ないのではなく、本気で外出を怖がっているから厄介だ。

義賢はなにも蝶よ花よとめでられながら育った箱入というわけではない。

こう見えて重臣の吉田出雲守重政より日置流弓術の薫陶を受け、また独自にこの弓術を学ばせた歩兵の一団を組織している。

実践的な歩兵用弓術を専門に扱うかの部隊は非常に強壮であることだろう。

つまり、彼女自身も一流の武人であり、また武力一辺倒ではなく政もできる頭脳を持ち合わせているのである。

「部屋の四隅に目が届く・・・これほど落ち着くことはありません」

至極リラックスした様子でほんわかと顔をほころばせる義賢。笑ったほうがかわいいな、と思いつつも盟友たる六角の跡取りの

今後に不安が尽きないのは俺だけではないだろう。

藤孝もため息をついている。

当初は

『よ、義藤様のお誘いを無碍にするとはなんたる無礼かッ！』

と、義賢を一喝してしまい、泣かせたことがあった。さすがに泣き出すとは思っていなかった藤孝は逆にばつが悪そうにしながらなだめるという一幕もあった。

今では幽斎ともども茶について語り合う友人にまでなっているが。

その幽斎は今義父の元常とともに泉州堺に行っていてここにはいない。

「なあ、義賢、城下に下りてみたりは」

「いやですう」

「ここに来る前にチラリと見たんだが、美味しそうな団子売っている店があつたぞ」

「団子、ですか」

一瞬、義賢が思案した。

あれ？ちよつと好反応？やっぱり甘味がいいのだろうか。

「おう、だから一緒に行つて見ないか」

「でも、お外は怖いんですよ」

「心配しなくても、観音寺城の城下の治安の良さは伝え聞いている。それにいざとなれば俺が守ってやれるし」

「あう、そんなことを言われても」

恐縮したように縮こまっているが、妙に頬を紅くしている。

普段からあまり話す機会がないからか、人と話して緊張しているのかもしれない。が、そこに付け入る隙があるはずだ。

「俺は義賢と城下に行ってみたいんだ。今まで一度もそういうことがなかっただろ。せつかく会っても部屋の中で暮を打ったり茶を楽しんだり、それも悪くはないけど、たまには一緒に外に行かないか」

女性経験が皆無な俺ではこの程度の文句しか出てこない。もう少し気の利いたことを言えればいいのだが、これが精一杯だった。

「でも、むりですう」

だが断られたッ！

どうしよう・・・涙が出そうだ。

口説いているわけではないけど、なんか振られた気分だ。

「すみません」

お願いだから謝らないでくれ。

本当に申し訳なさそうにしているのだから困る。

「義藤様、しかたがありません。城下にはわたしと共に参りましよう」

妙に刺々しい口調で藤孝が言う。
いつ機嫌を損ねたんだろう。

「もともと城下を巡り、見聞するお役目もありますし、これ以上ここにいては日が暮れてしまいます」

「そうだな。仕方がない。義賢、世話になったな」

今日のところは義賢のことは諦めよう。

せっかく観音寺城に来たのだ。かの樂市をこの目でキチンと見ないことには帰れない。何のために坂本ではなく京からも離れたこの地に来たのか分からないではないか。

そう思つて俺は冷めた茶を飲み干し、湯飲みを置くと外に出るために腰を浮かせた。

「あの・・・」

そのとき、声をかけてきたのは他でもない義賢だった。

「それはもしかして、お仕事のお話でしょうか？」

「いや、仕事というほどのものではないが。定頼殿の許可をもらつて城下を視察して回ることになったから、一族の義賢に同行してもらいたい、ということもあつたというのは事実だな」

將軍家とはいえ他国の人間だから、軽々しく出歩くのは気が引ける。その点、義賢が傍にいてくれたほうがいろいろと都合よく話が進んでくれるはず。

もつとも、義賢を連れ出したいというのは本音だ。政治的にも個人的にも六角には生き残ってもらいたいし、そのためには義賢に強くなつて欲しいのだ。

と、そんな意図を込めたお誘いだつたわけである。

「わかりました。そういうことでしたらすぐにご案内します」

あら？

すつくと立ち上がった義賢はスタスタと俺の傍までやって来た。

「案内してくれるの？」

「はい」

「え、でも外は嫌なんじゃ」

「お外は嫌ですけど、お仕事ですから」

えー、そんな簡単に気持ち切り替えられるの！？
俺も藤孝も啞然として義賢を見ている。

「早くしないと日が暮れてしまいますよ？」

まさか義賢に催促される日が来るとは。

ともかく、俺と藤孝は義賢についていく形で城下町、石寺に赴くこととなった。

其の八（後書き）

psp版の群雄モードで六角家を選んでみたわけですが、当主がモブの定頼だったことにまず驚いた。

次いでやつと畿内を攻略して美濃へ進軍使用とした矢先になんと義賢が謀反を起こした。

兵50、鉄砲30、雨天射撃スキル。それらを持つ義賢が謀反した。正直ショックだった。

其の九

六角定頼は智謀に長け、武勇を重んじる希代の当主である。

早世した兄に代わり家督を継いだ定頼は内政、外交に辣腕を振るい、十二代將軍足利義晴の擁立に貢献し管領代になるとともに、管領の細川晴元に自身の子女を嫁がせることで中央政治に深い関係を築くことに成功している。

そして、実質政治を動かしているのが幕臣の晴元であろうとも、未だ將軍は健在であり、その権威は確かに存在している。

そのため、六角家当主としても、將軍が尋ねてきたとあれば失礼のないようにもてなさねばならず、反目するのは決してよい方向には向かないということを理解していた。

今回、將軍一向が坂本ではなく、根拠地である観音寺城を尋ねたという申し出をいぶかしみながらも受け入れたのはそういう経緯もあつたからだつた。

加えて

「義藤様に義賢を気に入っていただかねばな」

という外交戦略也大いに関与していた。

義賢を次期当主と定めたのは、政治、軍事ともに他の子女に比して図抜けた才を示したからであり、多少性格に難があるといってもいざという時の切り替えには目を見張るものがある。よって、定頼自身には他の家臣等が抱いているような不安はほとんどないといつていい。

問題は、元来独立思想の根強いこの近江の支配を円滑に次世代へ

と受け渡せるかということだ。

家中には国人領主が非常に多く、自分が五体満足でいる今ならともかくとして、日頃弱気な義賢を当主と認めて服従するだろうか。

気が付けば白髪が目立ち始め、かと思えば日々小皺が深くなっていく。

重ねた月日はすでに五十に届く。人生五十年とも言う時代だ。次代に対する不安は日々膨らんでいくばかりである。

「定頼様。先ほどお嬢様が義藤様方とともに外出なさいました。おそらくは城下に行くものかと」

「ほう・・・それは重畳。して」

「は、すでに配下の忍び衆に命じ御一行の護衛をさせております」

「うむ。義藤様との関係は六角の将来を左右する重大な事柄。何かあつては困るからのう」

義藤との関係。すなわち、ただの盟友で終わるか、さらにその先に行くのか、ということ。管領との血縁ではまだ足りない。義賢が当主と將軍室を兼任することができれば、近江の国人衆も義賢に異を唱えずに従うことだろう。

「しかし、よろしかったのですか」

「なにがだ」

「如何に將軍殿下の御依頼とはいえ、城下をお嬢様に案内させると

「というのは」

「よい。我等は將軍家と事を構えるわけではないのだ。逆に城下町の賑わいを見ていただき、流石は六角とより信賴を深めていただくほうが良い」

後藤賢豊の疑問に対し、定頼は完結に答えた。

「それに、これは將軍殿下ご自身の頼みではなく、義藤様からの頼みであつた」

「義藤様の・・・」

それを聞いた賢豊はやはり、という顔をした。と、同時に不安げな表情を見せている。

賢豊の一族、後藤氏は進藤氏と並んで『六角氏の両藤』と呼ばれる重臣の中の重臣の家系であり、賢豊自身も智勇に優れた武人として内外にその名を轟かせていた。

定頼は自分よりも一回りほど若い家臣の頭の回転の速さに改めて感服した。

「神童と誉れ高いだけのことはある。あの方の目的は樂市を仔細に觀察することであらうよ。まったく義藤様とお話していると時折背筋が寒くなるわ」

そう言つと定頼は目を細めてカツカと喉を鳴らして笑つた。

「これは、すごい賑わいだな」

城下に下りた俺は町の賑わいに軽く圧倒された。

賑わいという点では復興中の京よりも上、堺と同じような空気を
感じる。どんなものかと言えば商人の雰囲気だ。

通りを慌しく人が行きかい、威勢のいい声が飛び交っている。

「楽市、これほどとはな」

振り向けば、そびえるきぬがさ織山の山上に築かれている観音寺城を見る
ことができる。

観音寺城の特徴はなんといっても総石垣という点だろう。南腹の
斜面には複数の郭が設けられ、一の丸、二の丸ではなく、伊藤丸や
澤田丸のように人の姓名が付けられている。

これは『城割』という制度によるものだ。

後の一国一城令の元となる制度で、家臣団を観音寺城に集めると
いうものだ。

楽市といい城割といい、何かと歴史を先取りする男だ。

「義藤様、行きましょう」

義賢の先導で広い道に行く。

その際も俺は抜かりなく周囲に視線を走らせる。

樂市によって大きく発展した石寺。その町並みを、人々を見ながら今後政策に活かせる物はないか探しているのだ。

残念ながら樂市を京で行うのは難しそうだが、それでも学びうるものはあるはずだ。

なぜ京ではムリなのかと言うと、公家の存在があるからだ。

たとえば三条西家という家がある。

ここは青苧座とのつながりが深く、一時には年百五十貫に及ぶ苧課役を得ていた。今でこそ越後の長尾家の台頭によって力を弱めているもののいまだに繋がりは深いままだ。

戦乱の世で公家も生活厳しいから、座を規制してしまえば要らぬ敵を作りかねない。

「うーん、ここまで活気があるのは・・・やっぱり羨ましいな」

「父上の政策が功を奏したのです。でも、父上はまだまだだと言っておりましたが」

「まだまだ・・・これでもですか」

藤孝も驚愕している。

と、そこに

「その御武家さん！この髪留め見て行かない？」

藤孝と義賢に威勢よく声がかけられた。

見れば女性向けの装身具を売っているようで、見るも鮮やかな小物が店先に並べられている。

「いや、わたしは・・・」

「いいじゃないか、見ていくのはタダなんだしサ」

半ば強引に押し付けるように商品を見せようとしてくる。

義賢はそんな女商人の意識が藤孝に向いている隙にその場を離れようとする。が、

「君はどう。これなんか綺麗だと思わない？」

「ひうう」

逃げ切れずに捕まってしまった。

タダより高いものはないというが、すこし見てみるだけのつもりが、気が付けば余計なものまで買わされることになりかねない。

不思議とこの商人の口上を聞いていると自然に買ってもいいかな、と思えてきてしまう。

なので俺は助け舟を出すことにした。

「あのーちよつといいですか、困ってるみたいなんで」

「おっと、すまないね。熱くなっちまってたよ」

義賢から離れた商人は言葉とは裏腹に、内心舌打ちをしているだろつな。

とりあえず義賢を死守した俺は商人と話してみることにした。

「聞きたいことがあるのですが」

「なんだい、あんたは。この娘たちの弟が何かかね？」

ぞんざいな扱い。久しぶりだぞそれは。

ブチギレそうな藤孝と顔面蒼白な義賢を視線でなだめつつ続ける。

「まあそんなところですね。俺、天城颯馬って言います」

さらっと偽名を語る俺。実名を名乗るわけにもいくまい。

「あたいは高島ってんだ、で聞きたいことがあるっていうが、あたいは商人でね」

「?・・・ああ、髪留めを買いますよ」

情報も商売道具とでも言いたいのだろう。

この時代、これで稼ぐ者もいるくらいだ。でも、こんなにちまちまと稼がなくてもいいだろうに。

俺は藤孝と義賢に似合いそうなものを見繕ってもらい、ここにいる幽斎と藤英の分もいれて四つ買うことにした。

「よっしゃまいどありッ。何でも聞いてくんな」

「うん、俺たちは外から来たばかりなんだが、ここはずいぶんと賑わっているのが気になってさ。なにか商人が集まってくる理由があるのかなと思ってね」

「君知らないのかい？ここの御屋形様が座を解体されたのさ。おかげで連中が握った経済的利益がこっちにも回ってくるようになったってわけさ。いまじゃこの町は一当てしようって思ってる連中が集まるようになってんのサ」

なるほど。今この町は非常に良く経済が回っているのだ。

しかもこの町は美濃から京都へ至る東山道、長光寺集落から伊勢へ抜ける八風街道があり、それらを管制できる要衝に位置する。

それは商人も集まるわ。

「じゃあいい事尽くしなわけですね」

「ま、そうだねえ。あたい等は稼ぎまくれるからね。あそこのでかい家があるだろう」

彼女が指差したのは通りを挟んで反対側に立つ立派な屋敷。

あそこも商人の家なのだろう。多くの人が入り出しているのが見える。

「芳野屋さんのところだね。醸造業で大当たり。他にも手広くやってるんだけど、最近じゃあお城にも出入りしてるって話だよ。羨ましいねまったく」

「へえ・・・」

俺は礼を言つて藤孝と義賢とともにその場を後にした。

「クツ・・・あの高島なる者。義藤様になんという言葉遣いをッ」

「いいじゃないか、そんなこと。向こうは俺の事知らないんだし」

「しかしですよッ」

猶も食い下がろうとする藤孝に買った髪留めを渡して有耶無耶にした。

「ありがとうございます」

「大切にしますッ」

感極まったように藤孝も義賢も髪留めを握り、目を輝かせた。そんな高いものでもないのだが。

「しかし、義藤様。何故あのような問いをされたのでしょうか」

「実際に楽市の影響を受けているのは商人の人たちだからね。直接聞いたほうが実体が掴めるんじゃないかと思ったんだよ」

「す、すごいです義藤様。さすがです」

「なにがだ」

別にすごいことではないだろうに。
持ち上げすぎだぞ、藤孝。

「あのーそれで何か思うところはあったのでしょうか？」

「思うところ・・・そうだな、強いて言えば流石は六角定頼殿と言ったところかな」

義賢としてはその答えだけで満足だったのだろつ。そうですかと言った後にほつとしたように息をついた。

そう、本当に流石としかいえない。

俺の見限り、この樂市は単なる規制緩和による商人優遇政策というわけではない。

座がなくなったことにより、六角家の市場に対する権利は絶対化するようになる。それと同時に多くの商人たちを味方につけることができる。

力をつけた商人たちと六角家は直接つながりを持ち、時には彼等を通じて経済政策を浸透させることもできるだろう。

一見すれば商人自治状態でありながらその実大名による経済統制政策なのだ。

無論、これはまだ政策の初期段階。

粗探しでもすれば欠点の一つや二つ見つかるはずである。しかしそれらを差し置いてもこの政策は利が多いものなのだ。

これほどの頭脳を持ち、しかも政局に口出しできる地位にありながら彼は中央にほとんど口を出さない。それでも必要とあれば兵を出す。父にしても晴元にしても都合のよい忠義だ。

出しゃばらないが助けはする。それはかの御仁が中央の争いから離れ、絶妙な距離を維持しているということであろう。

うまいこと將軍家、及び管領の権威を利用しているのだから保身に走る官僚よりもよほど狡猾だ。

義賢と俺が会う機会をわざわざ作ろうとしているのも単に六角のため。

俺にそのつもりはないが、彼がその気になれば俺と義賢の関係を無理矢理にでも進めることができるはずだ。

それをしないのは今はまだ――――俺を測る
――――段階にあるからだろう。

せっかく関係を作った將軍があつさり力を失つては元の木阿弥。だから定頼は俺を見定めようとしているのでは、と穿った見かたをしてしまう。

どちらにせよ、定頼は京の政争を俯瞰できるポジションについているのは間違いないことである。

「六角定頼・・・恐ろしい人だ」

西日に照らされる観音寺城を眺め、俺は誰ともなしに呟いた。

其の九（後書き）

元の木阿弥という諺が筒井順慶の故事に由来するものとは知らな
だ。

其の十

幽斎はその日泉州堺にやって来ていた。

といつてもそれは義父の元常に従ったものであり、本心からしてみれば義藤とともに近江国観音寺城に行きたかったのだが。

京をでた幽斎たちはまず和泉国松崎城に入り、そこで実父の晴員と久しぶりに会った。

現在、貿易港として揺ぎ無い地位を持つ堺は戦乱から身を守るために周囲に堀を幾重にも張り巡らせた環濠都市の形態を取っており、領主の権限の及ばない独立都市となっている。

そのことは和泉国内に城を持つ晴員にとつても和泉守護の元常にとつても諸手を挙げて歓迎するわけにもいかないことではあったが、彼等堺の商人たちがもたらす利益は相当なもの。関係をこじらせるよりは良好のまま維持したほうが建設的なのは明らかであった。

幽斎の訪問目的。というよりも、元常の目的はそんな堺との関係を維持していくためであった。

「はあ……義父上。わたしは堺に来る必要があったのでしょ
うか」

この場に義父はいない。

これは幽斎の独り言である。

堺に到着して早々、元常は会合衆の所へ行ってしまった。ささや

かな贈り物と飾り立てた口上を引き連れて。

元服したのにまだ子供、とそうに思われているのかもしれない。

（そうだとすれば、腹が立ちますね）

未だ幽斎は何の政務において実績もなく、戦で功を上げてもない。

認められたい。

幽斎はそう思った。

（藤孝は義藤様と近江国。とくに観音寺城城下ともなれば京にまで聞こえる経済都市。あの義藤様がそのような場所で何もなさらないはずはない。きっと向こうでなにか学ばれているはず）

幼少のころより仕えてきた主が自分の見えないところでまた成長しようとしている。喜ばしいことだが、その場に自分がいないのがなんとも悔しい。

さらには双子の姉がその場にいるのもこの時ばかりは恨めしかった。

「でも、これは好機かも」

ここは堺だ。義藤や藤孝が訪れている観音寺城以上の発展と賑わいを持つ都市。

人口は十万を数え、対明貿易や対琉球貿易、さらに日ノ本津々浦々の地域からの特産品が流れてきている。

かのベニス（ヴェネチアのこと）と並び称される大都市なれば、きつと新たな発見が、少なくとも主君の興味を引くものがあるはず。

「そうであるならば、早急に町へ繰りださねばッ」

意気揚々と幽斎は数人の共とともに出かけていった。

幽斎は人込みを掻き分け、堺の町を歩く。

人が多く集まり、町として発展すると土地柄というのが、独自の空気を持つものだ。

例えば京。

古の時代より培われた京都人の気質は、みやこびと荒廃してしまった今の京においてもどこか雅やかな風情を醸し出す。

一方の堺は全くの逆。

古を尊ぶ京とは違い、常に新しい風を呼び込む若葉のような青々しさと真夏の活気を併せ持っている。

そんな堺の商人たちを見て回ること一刻ほど。そろそろどこかの茶屋にでも入って休もうかと思っただころだった。

「なんでしょうか？」

見れば人だかりがきている。

どうやら喧嘩のようだ。大柄なあきんど風の男が歳若い女性に向けて大声でがなり立てている。

「お前んとこの悪い商売のせいやろがッどないしてくれんねん」

「そないなこと言われても、うちには関係あらへん。文句があるの

ならお父様に直接おっしゃったらええ」

感情に任せた男の言い分に対し、女のほうは事も無げにしれっと返す。

話を聞く限りでは、彼女の父親とのトラブルのようなので、彼女に当たるのはお門違いではないか。

男のほうは頭に血が上っているのか徐々に言っていることが滅茶苦茶になってきた。ついには顔を真っ赤にして逆上し、太い腕で掴みかかる。

（いけないッ）

幽斎がそう思った矢先。女の白魚のような細腕が鞭のようにしなり男の腕を絡め取ったかと思えば、大きな身体が空中で一回転していた。

「な!？」

周囲の観衆もわっ、とその光景に声を漏らす。

「この女^{アマ}ア」

「そこまでにしましょう」

投げられた男がいよいよ刃傷沙汰を起こしかねないと感じ、幽斎は割って入った。

「なんだガキ」

「ガッ……き、聞けば、彼女の御父上との問題が原因とのこ

と。そうであるのなら直接彼女の御父上のところへ行くなりすれば良いのではありませんか？少なくとも腹いせに娘子を害そうとするのはとても筋が通っているとは思えませぬ」

ついさっきまで気にしていたことを面と向かって言われてカチンと来た幽斎だったが、そこは我慢した。

「おうおうそうだぜ兄ちゃん」

「お嬢さん二人相手に暴力はいけねえな」

周囲の群衆がそれを面白がって囃し立てた。

幽斎の介人によりあきんどのほうが完全に悪役となった構図だ。

さすがにこの状況下で喧嘩を続けるほどの度胸はなかったようで、クソッ、覚えてやがれッ！と言って早々に立ち去っていった。

「あの、ほんまにありがとうございました」

「いえ、こちらこそ軽々しく割って入るようなマネを」

「そのようなことはありません。うちもほとほと困っております、正直、助かりました」

同い年くらいの女性は艶やかな長い黒髪を風に乗せながら、頭を下げた。

「うちは田中与四郎と申します。よろしければうちに寄っていかれませんか？せめてお礼だけでもさせてください」

田中与四郎と名乗った女性に従ってやってきたのは大きな商家だった。

屋号を『魚屋』いさやという大商人の家である。

奥の客間に通された幽斎は与四郎自らが点てた茶を喫することになった。

（これは）

与四郎の茶の手並みはお世辞を抜きにしても実に見事なものであった。京において幼いときより教養を身につけ、早くも文化人としての片鱗を見せつつある幽斎をして息を呑むほどに、その茶は幽玄にして繊細であった。

「わたしも茶の湯を嗜んでおりますが、このような深い茶の湯は初めてです。どなたかに師事されていたのでしょうか」

「ふふ、嬉しいことを言ってくれますね。茶の湯自体は北向道陳先生、ついで武野紹？先生に学びました」

「ほう、それは」

北向道陳は堺の舳松町に住む茶人で唐物の目利きに優れていると専らの噂である。武野紹？もまた茶禅一味を掲げ、十四屋宗陳もすやそうちんおよび、十四屋宗悟から学んだ茶を茶道として確立した有名人だ。

とくに武野紹？は賤民出身とされながら茶の湯によって身を起こし、従五位下因幡守に叙されるほどの人物である。

「うちは何れこの茶の湯を大成したいと思ってます。虚飾を廃し、

内面の美を磨いた侘びの茶を」

「侘びの茶、ですか」

茶の湯に限らず能であれ舞であれ、芸能を極めるのは難しい。まして彼女が体現しようとしているのは全く新しい概念であり、それ故に妥協のしようがない。いや、妥協ならばいつでもできる。先達がないのだから、必然、上限は定まっていらない。

それ故に長く、険しい道になる。

「それは、すばらしいことですね。そのときは与四郎殿に茶の湯の極意を学びとうございます」

「うちなんかでよければいつでも」

それから幽斎と与四郎は茶器の話に花を咲かせた。互いに学を好む者同士、気が合ったのである。

しばし、話が落ち着いたところで、与四郎が神妙な顔つきで口を開いた。

幽斎殿に見てもらいたいものがある、と。

「これは？」

与四郎が持ってきたのは黒光りした長い鉄の塊。

「南蛮渡来の武器。鉄砲です」

「武器。これが？」

その形状は幽斎の知るあらゆる武器と根本的に異なっていた。刃のない鉄塊でどう戦うというのか。

「火薬を使って鉛の弾を飛ばすんや。威力は弓矢以上のものになる。まだまだ改良の余地は残つとるけど、今の段階でも鎧を撃ち抜く事は可能や」

「それほどの威力が。では、試していただいても？」

「ここではあかん。火薬も使っし、雷鳴のような轟音がするんや。試すなら人のいないとこにいかな。明日でよければ準備しますえ」

「本当ですか？それではそのように。しかし、このようなものをどうしてわたしに？」

「うちはコレを公方様に献上しようと思ってます。幽斎殿にはその際の口添えをお願いしたいんや。知つてのとおり、当家は会合衆の重鎮を務めてますのでお互いに悪い話ではないと思います」

それを聞いて幽斎はたしかに、と思った。

与四郎からすれば將軍家とのつながりができるのでうまくいけば御用商人に取り立ててもらえるかもしれない。幽斎も幽斎で義藤への手土産を欲していたところであつたし、会合衆との付き合いが深められるこの機会を逃す手はない。

なによりこの田中家はかつて応仁の乱のころまで將軍家に仕えた同朋衆の一員でもあつた。

これも縁というものだろうか。

「わかりました。このお話引き受けましょう」

それは歴史を加速させる欠片。鉄砲という新兵器が戦場を駆け回るのもう少し後のことになる。

其の十一

「幽斎・・・それはッ」

俺が京に戻ってから数日。少し遅れて堺からもどった幽斎がなにやら黒い鉄の塊を持ち込んできた。

いや、鉄の塊などとは言うまい。

それは、鉄の棒の中心を繰り抜いたかのような穴が開いており、木製のグリップ、引き金等を兼ねそろえている。見間違えようのないその特徴的なフォルム。

「これは鉄砲という南蛮渡来の武器でございます」

1542年？そのとき、歴史が動いた。

「おおッ」

思わず声が漏れてしまった。

日本刀に勝るとも劣らない工芸的美しさ。は、まだない無骨な造り。だが、問題ない。威力があればいいのだから。

藤孝は無論その正体を知らないため、これが武器として機能するということに疑心的だ。どのように使うのか興味深そうに見つめている。

「幽斎、持っていていいかな？」

「はい、どうぞ」

「よッ、む、結構重いんだな・・・」

幽斎の許可を得て俺は献じられた鉄砲を手にとってみた。
思っていたよりもだいぶ重い。冷たい鉄がずっしりと手の中で沈む。

これが、あの鉄砲か。

テレビで見るものと実物はやっぱり違うんだな、と未来人ならではの感想を抱きつつ、丹念に視線を這わせる。

「それで、どうだった幽斎」

「え？」

「鉄砲だよ鉄砲、見たんだろ。これを使うところ」

「はい！それはもう・・・雷鳴の如き轟音とともに二十間ほど離れたのに大きな穴を開ける様は本当に圧巻でした！」

そのときのことを思い出しているのか若干、興奮しつつ幽斎が語ってくれた。

湿気や飛距離など、弱点はまだ多いが、その威力たるや目を見張るものがある。鎧程度では絶対に防げないのだ。と力説している。

「なるほどね、ご苦労様幽斎。最高の土産だったよ。疲れただろうからゆつくりと休んでくれ」

俺は劳いの言葉をかけつつ、これをどう扱おうか思案する。

結論。まずは数をそろえよう。

父上に話を通し、鉄砲の件を一任してもらったので、晴元を紹介することなく独自に動く権限を得た。

これがうまくいったのは、鉄砲の力をまだ誰も理解していないということと、その使い勝手の悪さから晴元も脅威としてみていないということの二点だろう。

晴元からすれば俺が南蛮渡来の兵器おもちゃを弄っている程度でしかない。事実、最初は興味を示していたが、有効射程が弓にも劣るとなった時点で役に立たないではないか、と言って呆れていたし、俺に鉄砲の製造を任せて欲しいと言ったときも右から左に流すようだった。

ということ、鉄砲全般を扱う権限を得た俺だが、さてどうするか。

「まずは生産だよなあ・・・堺だけじゃ追いつかんよな」

堺から献上された代物なので、なんとか堺を優遇してやりたいところだが、そももいかない。技術的にまだ未発達である以上、より高い品質と安定供給を実現するにはいくつか産地を分散したほうがいい。

「うーん、国友いつてみるか」

鉄砲といったら国友だろう。

割と安直な発想だが、他に思いつかないからしょうがない。螺子

の技術とかがネックだが、要領を掴めば刀よりも簡単に製造できるはず。

「幽斎は堺の田中家を通して鉄砲の生産・改良の交渉を頼む。藤孝は近江の国友だ」

「え、近江ですか？」

「ああ。堺には悪いが、まずは二つの産地で競争してもらう。義賢に書状をしたためるから届けてくれ。国友の鉄砲は六角と共同で進める」

南蛮渡来の鉄砲という新兵器を出汁に六角からより良い条件を引き出して共同制作に当たりたい。資金の提供を受けられればなお良い。

堺はもうしょうがない。田中家を窓口にしてかの家の顔を立てつつつながりを保持する。

「藤英はいるか？」

「はい、ここに」

「藤英は茶会の用意を」

「茶会、でございますか」

「そうだ。伊勢貞孝殿にはとくに参加してもらおうように図ってくれ」

さて、俺の初仕事だ。
気合入れてやっていこうか。

俺の人生最初の茶会は一月の準備期間を経て催された。

この間に、六角家との折衝を終え、堺と国友で先を競うように鉄砲の生産が始まっている。最も、まだまだ試験期間であり、試行錯誤を繰り返しているというのが実情だ。

それと同時に忍を紀伊国に放った。紀伊北部の根来に鉄砲が渡ったとの情報が入ったからだ。

紀伊国吐前城主。根来寺僧兵の長でもある津田ただかすなが算長が堺に鉄砲を持ち込まれたのとはほぼ同時期に鉄砲を種子島から購入していたというのである。根来と雑賀という紀州の二大鉄砲勢力がこれから生まれてくることになるかもしれない。

動向は探っておかねばなるまい。

「義藤様、大丈夫ですか」

「何を心配することがあるか。此度の茶会はそう堅苦しいものではないし礼儀作法は藤英たちから嫌と言うほどに叩き込まれている。そうそう檻褸は出さないよ」

心配する幽斎にそう答える。

それに今日が社交界デビューというわけではない。父上や晴元の茶会などにはもうすでに幾度も参加している。

毛色が違うのは俺が主催しているということだろう。

招いたのは晴元をはじめとする幕府要人。六角義賢などの畿内の有力大名やその名代。そのほか元太政大臣で現関白さらに俺から見て叔父に当たる近衛植家などの公家といったそうそうたる面々にこ

光来いただいた。

まったくもってありがたい。と同時に身が引き締まる思いだ。失敗は許されない。ここで將軍家の威信を示し、俺が単なる武刃者ではないということ、すくなくとも政治に参画する力があるということを示しておかなくてはならない。

「では、逝ってくる。」

ざつくばらんに結果だけいうつとなんとかなった。

ざつと三日間茶会、歌会、宴席と派手に催してやった。

まあ、集まったものの半分くらいは腹の底でいろいろ考えている連中なんだろうね。

こういった宴会は単なる娯楽ではない。言ってみれば外交の場なのだ。武家、公家、有力商人が一堂に会するこの場は顔売るには絶好の好機であるのだから。

「義賢」

「あ、義藤様」

お供の者を連れて帰国の途に就こうとしている義賢を見つけたので声をかけた。

「わざわざ来てくれてありがとうな。いろいろと拙いところもあったと思うが、まあ、あれだ、勘弁してくれ」

「そ、そそんな、わたしは存分に楽しませていただきましたし、
なによりも今日はお恥ずかしいところをお見せしてしまい、申し訳
ありませんでした」

「ああ、それに関しては気にすることはないよ」

今日の宴席で義賢は体調を崩し、倒れるといった騒動があった。
といってもそのときは無礼講に突入していたので事前に察知できた
俺が連れ出し内々に処理することで六角の体面を保つことができた
わけだ。

公私での切り替えができるとはいえ、生来人付き合いの苦手な義
賢が三日間もこの場にいるのは無理があったようだ。
診断結果は軽い貧血。

全校集会のときに全校の前で話さなければならなくなった際、血
の気が引いてやばかった記憶が俺にもある。その気持ちは分かる。

「身体に気をつけてな。また」

「はい、義藤様も御自愛專一にされますよう」

義賢は肩の荷が下りたとばかりにふわりと笑って帰っていった。

「さて、と。最後の仕上げだ」

「して、義藤様。某に何用でございますかな」

俺の目の前にいるのは伊勢貞孝。丸々と肥え太った大きな体躯。まだ寒いというのにじっとりと汗をかいている様子が生理的な嫌悪感を抱かせる。

ぶっちゃけ、コイツ嫌い。ありえない。

宴が終わり、皆帰った後で、特別に便宜を図って用意した部屋に招き、茶を点てる。

すべては貞孝のご機嫌をとるための狂言。わざわざその性向を調べ、華美を好むというから盛大な宴会にしたのだ。蒔いた種にはたわわな実を生してもらわねばならん。

「鉄砲、という武具をご存知で？」

「鉄砲ですか。最近しばしば耳にしますな。近江国国友と和泉国堺で生産が始まったとか。義藤様が陣頭指揮に当たっておられたかと存知しますが」

「うむ。だがこれがなかなか難しい。なにぶん南蛮独自の技術が多分に盛り込まれている故、研究開発から量産までにまだ数年かかる見通しだ。無論相応の銭がかかる」

「銭・・・なるほど、そういうことですか」

貞孝も得心がいったようだ。そう銭だ。

「そこで、政所執事たる貞孝を見込んで頼みがある。幕府の金蔵より鉄砲の生産費用を用立てて欲しい」

政所は幕府の財政、領知関係の訴訟を引き受ける重要な機関。伊勢氏はその長官である執事を代々世襲している家系である。

金子がなくては戦はできぬし政もできぬ。文字通り伊勢一族は幕府の心臓を握っているのである。

「ふーむ。しかしのう・・わしも大切なお役目でありますから、そう易々と金子の扱いはできかねますなあ」

チツ、強欲ジジイが。

俺はかなり早い段階からお前を注視してきたんだ。幕府財政を私物化してあまりある態度。横領も辞さない身勝手さ。力さえあれば今すぐにでも晒し首にしてやりたいところだ。

「そもそも財宝を惜しみなく与えることのできる人の子孫は未来永劫栄えることでしょう。そのようなことができる人には民草や大名たちから尊崇の念を送られること間違いはないはず。然るべきときに然るべき使い方ができる。それは名君であることの証左といえるだろう」

憤りを堪えて俺は言葉を紡ぐ。

「しかし、逆に金を惜しみ情けを捨てる者は疎まれ、その家は長く続くことはないだろう。無理にとは言わない。可能だけでいいから用立てて欲しい」

「ふーむう・・」

あと、もう一押しか。やはり、こういった手合いに道理を説くのは難しいと見える。

「それにこの話は貞孝にとっても悪い話ではないはず。成功すれば十分すぎるほどの見返りを約束できるぞ」

ならば『利』をもって釣ればいい。

「それは真ですか」

「うむ。知つてのとおり鉄砲は新兵器だ。その製法は秘匿され家中のものも重臣格しかその存在を知るものはいない。堺、国友、ともに我々の管理下に置いている。それであれば、だ。その武器としての性質もさることながら物珍しさで購入しようと言う者がいても不思議ではあるまい」

「つまりは商売をしようということですか」

「その通り。しかも競争する相手は他にいない。我等の一人勝ちよ……これまではな」

眉根を上げていぶかしむ貞孝に俺は続ける。

「紀州に鉄砲が入ったという話を聞いた。根来衆だ。これは厄介だと思わないか。我々の独自技術はすでにそうではなくなっているのだ。せっかくの儲け話もこれでは意味を成さぬ。そこで、根来衆よりも高品質の鉄砲によって流通を独占しようというのだ。誰しもより良いものを買いたい求めるものだからな」

「それで、わしに金を出せ、と」

「出せ、とは言っていない。できれば、と言っている。成功した暁に

は第一の協力者として相応の待遇が待っているものと思って構わない。無論父上の覚えも良くなるし、俺もいろいろと便宜を図ってやることもできるようになる」

俺はそこで言葉を区切って反応をうかがう。

今、貞孝の頭の中は出資とその見返りを天秤にかけていることだろう。多額の支出もそれがのちの数倍で戻ってくるのなら問題はない。

例え失敗しても次期將軍に恩を売ることもできる。うまくすれば今の將軍 - 管領体制の政治に横槍を入れることもできるかもしれない、と考えているだろう。

「晴元は関わっていない……いい機会だ。晴元に勝てるかも知れんぞ」

「ッ!？」

息を呑むのが分かった。

貞孝と晴元が水面下で対立していることは調査済みだ。もともと中央政治と財政。私腹を肥やさんとする二人は水と油と言ってよい。俺はこの三日間騒ぎの間、出席した晴元と貞孝が互いを牽制するようにはしていたのを確かに見て取った。

ジリ、と緊張が身を焦がす。

言いようなない圧迫感。心音が耳元で聞こえてくる。

鳥の囀りすらも聞こえないそんな中、貞孝は重い口を開いた。

「どのくらい出せばよろしいかな」

勝った。

その日、金を出させることに成功した俺は意気揚々と帰宅した。

其の十一（後書き）

気が付けば20万PV！？総合評価3000を超え！？皆様、本当にありがとうございます！！

其の十二

くるりくるりと季節は巡る。

寒さが和らぎ、雪が溶け、桜の花が咲き乱れ、緑の新芽が残雪を押しつけて顔を出す。かと思えば暑い日差しが肌を焼く。紅葉は風にさらわれて、空高く舞い上がる。

あつという間に四季が巡り。俺は十五となつて少しずつ政務に関わるようになっていく。

もうじき、將軍位の継承が行われるかもしれない、とは母の言だ。

ところが最近、大和から不穏な気配が漂ってきている。

木沢長政が遊佐長教と結託して畠山家の実権を握つたらしい。長政は畠山家の家臣でありながら晴元派であるから、晴元政権が大和にまで浸透したといつてもよい事件であり、現政権下においてこれを危惧する者は少ない。

長政はさらに信貴山城や二上山城を築城し始め、畠山家におけるその権勢は圧倒的である。大和から和泉に至る交通の要衝であるこの二箇所を抑えるということからも単なる愚将でないのは明らかだ。

畠山家の様子を探っておかないといけないな。

そして、俺だが、今、山の中にいる。より正確には山中にある開けた場所。

「構ええッ!!」

俺が見ている前で、幽斎の号令とともに横一列に並んだ二十人の

足軽たちが鉄砲を構える。

銃口の先、50mほど離れた場所に的。

「撃てえッ!!」

それを合図にして、一斉に引き金が引かれた。

激しい炸裂音。そして白い煙を鼻を突く異臭。特に音は慣れないものが聞けばそれはもう動転するだろう。至近できけば鼓膜に異常が出てもおかしくない。

「.....相変わらずすごい音ね」

俺の隣で黒髪の少女が顔をしかめて呟いた。

細川昭元。

ボブカットの黒髪に深紅のカチューシャをつけている。

晴元の娘である。

何故ここにいるかと言えば、当然ながら送り込まれてきたからだ。俺を監視し、晴元に情報を送るのが彼女の役目。

ちなみに彼女は実に真面目に働いてくれるので、晴元のスパイであることを差し引いても傍においておくのはプラスであると思っっているし、父親と違い、幕政をどうこうするつもりも皆無のようだ。それはもう数年の付き合いになるから分かる。

「幽斎ッ！結果は!!」

「はい、只今!!」

幽斎が俺のところまで駆け寄ってくる。

「正確に的を撃ち抜いたのは二十発中の五発のみです。ほかは全体的に当たることはありませんでした」

「五発だけか・・・」

「はい」

ふむ、鉄砲の命中精度の低さは今に始まったことではないし、実戦では不特定多数の敵勢に対し撃ちかけるのだから多少甘くとも目を瞑れる。

「でも、それでは武器としての運用は難しいのでは？」

「そうなんだよなあ・・・この程度の距離は騎兵なら一気に走破しちまうし、馬防柵を使うにしろ正面からの一斉射は効果薄いよね」

「う、すいません・・・」

「幽斎が謝る事ではないよ」

思ったような結果がでないから鉄砲を持ち込んだ幽斎は責任を感じているのだ。すでに五年あまりが経過し、金も相当額使い込んでいる。

今、俺の手元には堺筒と近江筒を合わせて百二十挺ほどが保管されている。

目標は最低でも三百。

しかし、この結果では矢で弾幕張った方がいいんじゃないかね、とも思えて複雑だ。

「それと、義藤様のおっしゃったような『一斉射撃』はやはり無理があるかと思います」

幽斎は俺の指示のとおりに号令で構え、号令で撃つということを繰り返してもらっているが、これが結構厳しいらしい。

「やっぱり？」

「はい。鉄砲を構えてから狙いを定めるまでは個人差がありますが四、五秒ほど。それ以上になりますと手ブレが大きくなってしまい正確な射撃ができません」

「鉄の塊だからな、仕方ないか。大人数の号令による一斉射撃は命中精度を大幅にそぎ落とすことになるわけだ」

「それと鉄砲の左右の間隔ですが、最低でも六尺から七尺は離れていないと、射撃の際の火花によって火薬が暴発する恐れがあります」

六尺から七尺、2 mくらいかな。

あれ、ということは長篠合戦はやっぱり構成の創作だったのかな。千人並べてもざっと2 km・・・流石に無理だろ。

「それならば、鉄砲は少数による遊撃、特に奇襲に用いる、くらいですね」

幽斎の話聞いた昭元がそう言う。

それに関しては同意する。音だけでも混乱を引き起こすことはできるのだから不意をついた場合の効果は期待できる。

「野伏のようで気に入らんが、それが最も効果的か」

ほかには島津の車撃ちとか使えそうだ。三段射撃よりは有用性がありそう。

機を見て訓練してみようか。

ふむ、空も赤くなってきたし、続きは帰ってからにしよう。

「よっしゃ、今日は終わりだッ。お開き、解散ッ皆ご苦労!!」

俺は立ち上がって、すたすたと歩き出す。

「あ、義藤様！お待ちください！」

「山駕籠は!？」

「んー俺は歩く。乗りたければ乗ってっていいぞ」

「できません！」

橙色の空に黒い点がポツポツと。

カラスたちは我先にと、壱を目指して飛んでいく。

その様子がなんとなくおかしくて。でも、それならいそいそと山を下るわたしたちもどっこいどっこいかな、と思ってしまうたり。

足軽たちが列を成しているのはさながら蟻の行列だ。

「ひゃあああ!？」

「ッ!？」

前方から悲鳴が聞こえた。

今のは、幽斎かッ!

最後尾にいて隊の監督をしている昭元は腰の刀に手を伸ばし、列の中央にいる幽斎と主君を確かめる。

昭元は他の将に比べて目がいい。後方から下方を見下ろす形になっていたのも幸いして状況を確認するのは容易だった。確認して、力が抜けた。

「何をやっているんですか、あの人たちは・・・」

視線の先には同僚の幽斎と黒い羽織の主。そして主の手にぶら下がった緑色の物体。

びろーんとなったりもぞしたりしている。

カエルだった。

しかも大きい。手の平大だ。それを義藤様がほれ、ほれ、と幽斎に近づけてからかっている。

幽斎もいくら女の子らしいとはいえ細川の武将。悲鳴はどうかと思っけど・・・

でも、いきなり目の前に現れたらわたしでも上げるかな。

「義藤様、後生ですーカエルは無理ですよー」

「なにッ！モリアオの可愛さが理解できない、だと!？」

ないやら驚愕の表情を浮かべている。

いやいやいや、わたし的には幽斎に同意ですよ。

あのカエルはモリアオ、というらしい。

義藤様に逃がされたカエルは迷惑だ、と言わんばかりにクルルル、と喉を鳴らして去っていった。

相変わらず少しずれた主人に照元は嘆息する。

思えば、最近奇行が増えているように思う。春は農民に混じって田植えをしようとしたし、夏に海に行けば見たことのない泳法で全力。しかもかなり速かった。

今日だってそうだ。カエルはいいとして、駕籠に乗っていいなどと。

あれは義藤様のような貴人が乗るべきであって、その他の人間は間違っても乗れない代物なのに、まるで気にしていない。

- - - - - うつけ

- - - - - 婆娑羅

という言葉が頭をよぎる。

そういえば、尾張はうつけが継いだらしい。噂に聞く尾張のうっ

けの行動と義藤様の行動は似通ったところがある。
だが、しかし。

義藤様が単なるうつけであるはずがない。

幼少より神童とされてきただけではない。初めてお会いしたときの、射抜くような冷たい眼光。

あれが、うつけの眼である筈がない。

穏やかでやさしく、時におどけてみせる義藤様と冷然としてその瞳に陰を隠した義藤様。いったいどちらが本当の義藤様なのだろう。

「いいか、モリアオとシユレの違いはな・・・」

「どんだけカエル押すんですか!？」

アレを見てると考えるだけ無駄な気がしてきた。

とにかく、お帰りになったら真っ先に諫言しないと。幽斎も藤孝も義藤様が是とすれば道理を逸脱しても問題なしとしてしまう傾向があるから、やっぱりわたしがしっかりしないと。

わたしの仕事は義藤様の生活をお支えすること。

真面目だけがとりえのわたしにはそれくらいしかできないから。それなら自分の仕事を精一杯こなさないと。

結局その日、山を降りたのはお日様がとつぷりと暮れてからだつた。

其の十二（後書き）

義藤「あれ、シュレとか言ってもこの時代はわからないか・・・」

照元にはスパイとしての自覚はなく、またそのような行動もほとんどしていないです。

変わったことがあつたら報告するというのは組織の人間として当然なので。

其の十三

日に日に日は長くなり、寒さの和らげる穏やかな日差しが縁側に座る身体を包み込む。

俺は空に漂う浮き雲を肴に、暖かな桃色の花をつけた桜を眺めながら刀に打粉を打っていた。

最期の悪あがきに庭の片隅に残っていた冬の名残も、数日前にうちに消え去り、土の合間から少しずつ緑が顔を出している。

俺の手にあるのは足利將軍家宝、大典太。剣としての性能は一級品。俺自身がその切れ味にぞっとしたほどだ。すでに作刀から数百年。いまだに名刀としての輝きを失っていない。

「義藤様ー！」

？

藤孝の声が聞こえてきた。そういえば今日はここに来るんだっとな。

「ここにいますぞー！」

俺を探している様子なので返事をする、廊下を駆ける足音が近づいてくる。

「こちらでしたか。お探ししました」

「おはようございます、義藤様」

「おはよう藤孝それに幽斎も。いったいどうしたんだ、そんなに息

せき切って・・・」

肩で息をする二人に少し気圧されながら尋ねてみた。

「そ、それが、えと、あと・・・」

「落ち着けて、ほら深呼吸。何があった」

「は、はい・・・」

スーハー、と吸って吐いてを三度ほど繰り返し、改めて藤孝が口を開いた。

「母君が、慶寿院様がお倒れに」

「はあ!？」

母が倒れたという情報を聞いてすぐ、俺は屋敷を飛び出して母のもとへ急いだ。この世に生を受けて十五年が経過し、それ以前の、前世の記憶は薄れつつあり、家族のことはほとんど思い出せなくなっている。故に俺の感覚でも母は慶寿院一人だけ。それが、倒れた。

「母上ッ!!」

障子襖をバン、と開け中に転がり込むように室内へ入った。

「あら、義藤。いったいどうしたの、そんなに息せき切って・・・」

「は、いや、あれ」

布団から身を起こし、のんきに麦湯を啜っていた母は思いのほか元気そうだった。

「お倒れになったと聞きましたが、お体のほうは大丈夫なのですか？母上」

「それでわざわざここまで来たのですか、義藤。」

先ほど俺が藤孝たちに取りつたりアクションとほぼ同じ反応したのは流石母子。眼を丸くして驚いていた母上は、はあ、とため息をついた。

「わたくしの身体でしたら心配せずともなんの問題ありませんよ・・・ただ疲れがたまっていたようで、眩暈をもよおしただけですからね」

「そうなのですか。それはよかった。藤孝と幽斎が慌てていたものですから何かよからぬ病なのではと心配してしまいました」

そうか、大したことはないのか。それはよかった。と、安心したのも束の間。

「はあ。義藤。母が倒れたくらいで取り乱してはいけません。あなたは將軍家、延いては日ノ本を背負って立つ男なのですからね」

「・・・はい」

また始まってしまった。母上の説教タイムが。
こうなると長い。

俺は幾度もこれを経験したために無我の境地を会得するに至っているのだ。

「……………そもそも、將軍家というものは……………」

「……………わたくしが嫁いできたときにはもう……………」

「……………あなたのお役目は……………」

延々と、反論を許すことなく語り続けることおよそ一刻。

その間俺はひたすらパリー・もとい無我を貫いた。

そうしているうちに、やっと母上は、ふう、と一息ついた。

「聞いていますか、義藤」

「はい、それはもう。暗唱できるくらいに……………ですが、母上を心配して駆けつけてきた息子にこの仕打ちは流石にないのでは」

「Shut up!」

「!?!」

轟、と母上から強烈な気が解き放たれたような気がした。

英語を叫んだのは俺がかつてついつい口を滑らせて、そんな言葉がありますよと言ってしまったことに由来するのだが、どういっわけかその口ぶりは、英語を知る俺でさえ、

「知らねえわりに発音うめえ」

と、感服する次第であつた。

「義藤。ついこの間も京の町をうろつろとしていたようですね」

「・・・何のことでしょう・・・」

「惚けてもムダです。わたくしの侍女たちが噂していましたよ。京の団子屋で義藤様を見かけたと。ずいぶんと人気があるようですね。わたくしも鼻が高い」

一応顔を隠していたつもりだったのに、なぜだ・・・

「・・・義藤様」

グサグサグサグサッ

背後から突き刺さる四つの視線が痛い。

「今後は供回りもつけずに外をふらつくことのないように」

「はい」

「それと、これは最も大切なことなので心して聞きなさい」

母上はそれまでとは違う声色で俺に真っ直ぐに向き合った。知らず、身が引き締まった。

「今後、我が身に何があるうとも決して目の前の大事を放り投げて戻れることは許しません」

- - - - -え

「縁起でもないことを言うものではありません。母上」

内心の動揺を悟られないようにしつつ訴えた。
まるで、今のは遺言ではないか。

「確かにその通りですね。ですが、今は乱世の世。こうして戦を知らぬわたくしですら明日をも知れぬ世なのです。言うべきことは言っておかなければいけませんから。そして、あなたはそんな世の中に変革をもたらす者です。囚われてはなりません」

「は、い・・・」

もとは摂関家の令嬢というが、武家の妻として、母として、強く確りとした信念を持つ女性である。

その威風たるや堂々とし、他の何者にも遅れをとることがない。

俺はその身に、雷に打たれたかのような衝撃を受け、その母の言葉、胸に刻みこんだ。

一庫城の本丸で城主の塩川政年は喉を震わせてつぶやいた。

「おのれ晴元」

ただ一言。

その一言が端的にこの状況を言い表していた。

山の麓に翻るは三階菱に五つ釘抜。

三好家の紋である。

突如として挙兵した三好勢があつという間に押し寄せ、あれよあれよとしているうちに完全に城は包囲されてしまった。

こちらは摂津のいち国人領主。対するは近年勇名を轟かせている三好長慶率いる連合軍。籠城以外に術はなく、それもどこまで続くか。

「政年様、やはりこの裏には管領様が関わっているのでしょうか」

「十中八九そうであろうな。ヤツめのあの蛇のような執念さにはほとほと呆れるわい」

かつて、細川家を二分した争いがあつたとき、塩川家は晴元ではなく当時の管領である高国に付いた歴史がある。

戦国の世において敗者は冷や飯を食わされるのは道理である。細川高国が果てたのち、方々に手を尽くしてやつと生きながらえることができたというのに。

いまさら晴元に逆らう気はないが、おとなしく討たれるつもりも毛頭無い。

「わしの妻は高国公の妹であり、国満はその血を引いておるのだ・・和睦の仕様が無いじゃろう」

今、できることはすべてやり終えた。

それでどうにもならないのなら、武士らしく腹を切って果てるだけ。

政年はしわを刻んだ口元をきつく引く結ぶと、徹底抗戦の下知をくだした。

其の十四

一庫城を囲んだ三好軍は本陣を城からやや後方、平野部に敷きつつも、ねずみ一匹逃さぬように山全体を取り囲んでいた。

一庫城は堅牢な山城だ。標高180mほどの小高い向山と谷を隔てて向かいにある城山。この二つの山を本拠とする、二山一城形式をとっており、北側と西側に一庫川、南側に初谷川が流れ一庫川に合流している。

攻めるに難く、守るに易し。

まさに、そんな言葉がぴたりと似合う山城である。

城を陥落させるにはどうすればよいか。

力押しか、計略か、軍議は紛糾した。

「いかに堅牢な城といえど、この戦力の差は明白だ！ここは一挙に押し寄せ、塩川の首を取るべきだ！」

「しかし、それではこちらの犠牲も大きくなる。この戦。敵の降伏は許さずなで斬りとの命を受けておる。向こうもそれを分かっているからこそ、いざとなれば死兵となって押し寄せてくるでしょう」

「まさか、臆されたかつ！我等武士は戦に生き、戦に死ぬものぞ。今さら己が命惜しさに軍議を滞らせてもらっては困る」

「命が惜しいなどとは申しておりません。私もまた武士。いざという時は命をかける覚悟はできております。ですが、徒に兵を損なうのはどうか、と申しているのです！」

荒れに荒れる軍議をやや冷めたまなざしで眺めているのは三好長慶。

この戦では総大将として指揮を任されている。本来、総大将を任されることは非常に名誉なことであり、誰もがうらやむポジションであるが、長慶の表情は暗い。

長慶は父を細川家の争いの中で失った過去をもつ。今の直属の上司が、父の仇である晴元。この一庫城攻めもその戦いにおいて塩川政年が敵勢力に加担したことに端を発する。が、それはつまるところ長慶の父の同土であったということ。

（気の乗らぬ戦だ・・・）

それが長慶の偽らざる本心だった。

そんなやる気のないボスを差し置いて、軍議は白熱している。当初は10も20も出ていた意見が、話を重ねるうちに淘汰され、数を減らしていった。

やがて、意見は概ね二つに分かれることになった。

攻めるのか、計略か。

（これからは軍議に参加するものを減らす必要があるかもしれない）

三人寄れば文殊の知恵、と諺は言う。

愚かな者、平凡な者も三人集まって相談すれば、文殊菩薩のような知恵が出るものだ。という意である。

しかし、見ての通り紛糾する軍議にもはやあきれ果てている長慶はこれ以上の無様を晒すくらいならと、そのように考えたのだった。頭数だけそろえても、意味がない。

そして、持ち前の優秀な頭脳で、自らの考えを纏める。

兵数は圧倒的にこちらが優勢。なりふり構わず突撃を敢行しても、敵を打破できることは確実だ。

しかし、その際はこちら側もそれ相応の被害を覚悟せねばならない。もとより敵の陣地への強襲は多数の犠牲を出す。それが、死兵を相手にするとなればなおさらのこと。

一方の計略は残念ながら現実味がない。

城方の方針は徹底抗戦で纏まっている。玉砕まで覚悟している相手から離反者を出すことは難しい。これに関しては自身の参謀である松永久秀も同意している。

もつと前に言ってくればちゃんとした準備ができたんですけど・

久秀はそう言って、長慶に対し、申し訳なさそうにはに cand 見せた。

（久秀は優秀だ。時間さえあれば確実に計略の手を伸ばすこともできただろうに）

このまま兵糧攻めにするという手もあるが、相手の備蓄量も定かではないし時間もかかる。ここはやはり、全軍に命じて城を攻撃するしかない。

「みんな、聞いてくれ」

長慶の言葉で軍議の場が静まった。皆がその視線と意識を長慶へ向ける。

「みんなの意見は分かった。そのうえで言わせてもらう。我が軍はこれより一庫城への攻撃を開始する。極力時間をかけず、反撃に移

る隙を与えずに敵将塩川政年の首をとる」

総大将の決定に不服そうな顔をする者、自分の意見が通ったのだと、得意げにする者、早々に戦の準備に取り掛かろうと気を引き締める者、それぞれいたが、反論はなく決着した。

「兵の消耗は最小限になるように配慮

」

「軍議中申し訳ありません。至急お耳に入れなければならぬ儀がございまして」

長慶の言葉は突如軍議の場に姿を現した伝令兵によって中断した。訝しげな顔をする長慶も、その兵の表情から火急の用件である事を感じ取り、傍まで呼び寄せた。

俺は自分の部屋で、身体を拭き清め、着物を着替えていた。

すでに日課となつた朝の鍛錬は、身体が大きくなつた今、さらに厳しいものになっていたが、疲労感すらも、心地よく感じる事ができる程度には余裕があつた。

「失礼いたします義藤様！」

勢いよく藤孝と幽斎が俺の部屋に飛び込んできた。が、着替えの途中である俺と目があつたとたんに、ひゃほおおうあわ！と奇声を

発して飛び出て行った。

双子による転回、ロンドートからの後方三回転の完全シンクロという惚れ惚れする大技をかましてくれた。

驚異的な身体能力だ。内村 平もびつくりだ。

「まあ、次は返事を待つようにな」

「・・・はい」

とりあえず、服を着て改めて招き入れた二人を注意する。

若干の頬の紅潮が見られる。

ふむ、まっこと初心なヤツだ。

と、そういう場合ではないということを思い出した。あの勢いで飛び込んできたことから察するに、一庫城の戦いで動きがあったのだらうと推測する。

そうなんだろ、幽斎。

「は、はい」

幽斎が飛び上がりそうになりながら返事をした。

「それが、伊丹城主の伊丹親興殿や三宅城主の三宅国村殿がこのたびの戦の不当性を主張しており、木沢長政殿と共に伊丹城へ兵を集中しているとの事」

「一庫城に向かわせた物見によると、正午すぎから撤退をはじめた三好軍は追撃に出てきた塩川勢に打撃を受けながらも各々の所領へと帰還した模様です。おそらくはこの動きを察してのことでしょう」

幽斎に補足説明を加える藤孝。

二人の説明を聞きつつも、俺はどう動くべきか思案する。

長慶が越水に戻ることでできたのはいいとして、この戦がそれで終るか、といえん否。戦端が開いてしまった以上は明白な勝敗をつけるか、誰かが仲介して終らせねばならない。

ここで俺が仲介して、ことが収まるか………ないな。

残念ながらその可能性はない、哀しいかな軍事力に乏しく『次期』將軍というだけではどうにもならない。三宅や伊丹ならまだしも、ここ最近増徴している木沢が従うとは思えない。

「なあ、今すぐに集められる兵はどれくらいだ？」

「今すぐ、ですか……そうですね、3000くらいでしょうか……」

幽斎の口から出たのは3000という木沢と事を構えるには少なすぎる数字だった。

正面から戦うという選択肢は消えたな。

「じゃあしょうがない。俺は一時京から姿を消そう」

「はあッ!？」

「どうしてですかッ!？」

「そりゃあ、このままでは木沢たちがここに軍を差し向ける可能性があるからだよ。考えても見る。ただでさえあいつ等の今回の行動

は幕命を無視した形になっているんだ。言ってみれば逆賊だ。それを正義に置き換えるには、將軍の後押しを受ける必要がある」

晴元と敵対しているが將軍に明確な戦意があるわけではない。ということを説き、悪は晴元であるのだと主張すれば今回の拳兵も正当化されることとなるう。

しかし、笠置城の築城、畠山長経の弑殺といった幕府の意思を無視した行動はすでに幕府からして眼の上の瘤だ。残念ながら我が父が木沢長政の意見を聞くとは思えない。

もしかしたらその穂先が俺に向くなんて事もあるかもしれない。故に消える。戦術的撤退というヤツだな。逃げるわけじゃないんだよ。

「そうだな、行き先は和泉の松崎城。お前達の父君を頼るとしよう」

其の十五

難を逃れて和泉国に入ってしまったら、思っていたよりのさらに情勢が逼迫していることがわかった。

京にいたときよりも木沢長政の拠点に近いこともあってより多くの情報を仕入れることができる。今まではほぼ京の中に引きこもっていた俺だが、自分だけの情報網というのはどうしても小さくならざるを得ないらしい。

やはり、一端外から物事を見るとというのは大切なことで、俺もそのことを思い知ったわけだ。

というわけで、現在の畿内地方の状況を解説しよう。

一庫城の塩沢家の処遇を巡って晴元と対立した木沢は將軍を擁立しようと画策するが、近江に逃げられてしまう。そのころにはもう俺は和泉いトonzラしていたわけで、頂くものがない状況に追いやられていた。しかもかわいそうなことに塩沢や伊丹たちがこぞって晴元と和解してしまったからさあ大変。

木沢としてはお前等に請われて発ったのにいきなり裏切るとはツと世の無情を恨んでいることだろう。

次いで木沢の本拠で政変が勃発。木沢派の家臣たちが肅清されてしまった。

畠山政国も追放されてしまい、その後は遊佐長教との関係を修復した畠山植長が当主に復帰した。河内畠山尾州家の支持基盤を失い、もはや頼るものすらないという。

「かわいそうになあ・・・」

これだけの話を聞けば、木沢長政に対してそういう感情を抱くのも仕方がないんじゃないだろうか。
人として。

「しかし、これも自業自得でしょう」

「それを言ったら終わりだろうが」

昭元がにべもなくそういうのでついつい言い返してしまった。
しかしまあ、自業自得というのはたしかにその通りなんだが、こ
う、諸行無常というか、世の移り変わりの儚さを思うとなあ。

「なあ？」

「何がです？」

昭元よ、地の文を読んで一人前だぞ。
読心しろってことじゃなくて、つまり、あれだ、阿吽の呼吸って
やつで。

「何とかならんか」

「だから何が？」

ついに「です」すら消えたか。
なんとなく機嫌悪い？

そう思ってみてみると、目の前で正座をしている昭元が妙に肩肘
張っているのが分かった。居心地が悪そうにしているというのが一

番しつくりくるかもしれん。

まあ、俺だって美少女とこの狭い部屋で2人つきりというのはハドル高かったけどな。

幽斎たちは、兄妹みたいなもんだし・・・向こうのほうが年上だけれども、そんな気が何故かしない。

「なんか落ち着きがないな。どうかしたのか」

「これから戦だというのに、どうしてそう落ち着いてられるのか不思議なんだけど」

ああ、合点がいった。

戦前に気持ちが昂ぶっているのか。もしくは不安か。精神的に不安定になつていたというわけですね。

「俺だって平静ってわけじゃあないけどさ。でも、あそこを攻めるに足るだけの戦力は結集しているわけだろ？心配してもしようがないさ。それこそ、父君に連絡を取り、兵を集めたのは昭元だろう。なら大丈夫。この戦の最大の功労者は昭元だよ」

通常、戦の功は戦場で戦った者が多く与えられる。なぜならば目立つからだ。命も賭けている。故に恩賞は多い。しかし、俺は裏方を蔑ろにしないように心がけることにしたのだ。これから俺は初陣だが、勝ちを拾えるだけの兵力を整えることができたのは、開戦前から動いてくれた裏方がいるからだ。

よってこれは妥当な評価だと思うのだが、当の本人は

「いや、わたしはただ自分の仕事をしただけ、だから」

と、細川本家の娘は恥ずかしそうに俯いた。謙虚なのか、褒めら

れることに慣れていないのか・・・

どっちでもいいんだけど、そういう態度をされるとこっちまで気
恥ずかしくなってしまう。

「・・・・・・・・」

会話が続かん・・・

普段こういう状況になると飛び込んでくる双子も今は戦の準備に
追われてやってこない。藤英も同じく。

俺に女の子とのコミュニケーションスキルを求められても困るつ
てのに、こんなことなら前世で合コンでもなんでも参加しとけばよ
かった。下手に硬派ぶったおかげで彼女いない暦は年の数。肉体年
齢が15の俺も精神年齢は37だ。当時の俺がたとえ厨二病を患っ
ていて、精神的に未熟であつたと仮定してもだよ。余裕で30オー
バーは堅いね。そろそろ魔法が使えるようになってもおかしくない
頃合だと思うのだが、幸いなことに、その気配は一向にない。

俺がよく覚えてもいない前世の記憶を掘り起こしている間も、沈
黙は物質的な圧力を持って我が総身に押し掛かってくる。眼に見え
ないが、子泣きジジイが引っ付いていたとしても驚かないね。

とにかく今はこの状況をどうにかするところから始めないといけ
ない。

じゃあ、どうする。

つか、普段どんな話してたっけ？やべえ、それすら思い出せね
え。

ハッそうだ、昭元のほうから話題を提供してもらえばいいんじ
ゃないか？そうすれば俺はそれに合わせればいいだけだ・・・

俺は期待を込めて昭元のほうを見る。

目が合って、居心地悪そうに眼を逸らした。

くそう、ダメだ。とても向こうから話しかけてくる雰囲気じゃねえ。こんなときばかり、夕日がロマンチックに輝いているしよ。いったい俺に何を望んでんだよ。

俺には女の子を喜ばせるだけのボキヤはねえってのに。思い出せ！光源氏はどうやって女の子を口説いた？六条御息所は？空蝉は？夕顔は？明石の御方は？桐壺は？違う、そりやお袋じゃねえか！てゆうかそもそも口説いてどうする。どうする、俺！

その後の展開はとくに面白いことはなかった。

ただ悶々とする時間が過ぎ、少しずつ話が進むようになったといっただけ。あえて成果と言うとすると昭元との距離が多少近づいたようない感じがするというくらいか。

ひとつ言えることは、あのような息苦しい超重圧空間に押し込まれることは金輪際絶対御免だということだ。

西の山に日が沈んでから数刻がたった。

空は昼間の快晴が嘘のようにどんよりとした雲に覆われ、本来であれば鏡のように美しい満月が拝めたであろう夜空は星の光すらも

差し込まない。

街灯もないこの時代。月の光のない夜は真正の闇となる。

俺たちはまとわりついてくるよな濃厚な闇の中を進んでいた。

総勢7000になる大軍を分け、3000の先鋒が松崎城を発ち、
ややあつて、残り4000の本隊が合流すべく出発した。

この数字は当初の2倍以上の数字である。昭元が駆け回ってくれたおかげなのだ。

軍勢は足並みをそろえて、闇夜に行く。

狙うは河内と大和の国境にある二上山城。木沢長政の持つ城の一つで、防備はかなりのもの。堅牢といってもいい。

漆黒の闇の中の行軍を経て、俺たちは二上山から一里ほど離れた場所に陣を敷いた。城側から発見されにくい場所を選んでいる。時は薄らと東の空が明るくなるかというところだ。

「なんとか夜明け前に着けたか」

「そうですね、一時はどうなることかとも思いましたが」

「義藤様、武具一式もすでに届いております」

苦笑する幽斎、報告する藤孝

今回の行軍が速やかにそしてなにより、静かに行えたのは兵が鎧の類を身につけていなかったからだ。

武器の類は剣を除いて先鋒の部隊や小荷駄隊に分担させた。物見の兵に音で察せられるのを極力防ぐためだ。もちろんこれは諸刃の剣で、失敗すればほぼ丸裸という状況だったので、提案当初は反対されまくった。

「もうこんな行軍はやめてよね」

「分かってるっつの」

昭元の言うとおり無謀極まりないこの作戦、やってくれといわれ
てももうしないだろう。

それが無事成功したのは、晴元の部隊が木沢の本隊とにらみ合っ
ているために、こちらへの注意が散漫になっていたおかげだ。

この二上山城にいるのは、木沢の後詰として配備された兵300
0。

「この戦の目的は晴元とにらみ合っている木沢長政への援軍の阻止
と退路の遮断だ」

「はい、しかし、このまま包囲してしまうこともできるのでは？」

「なに言ってるの幽斎。兵力自体は上でも、包囲してしまえるだけ
の兵力差じゃないでしょ。手薄になったところを一点突破されるの
が落ちよ」

「わたしも藤孝に賛成。信貴山城から援軍が来るかもしれないし、
そうなつては挟撃されることにもなりかねないわ」

「とにかく、大前提として敵の目をひきつけるということ。そのた
めにこれだけの兵を晴元から借りたんだ」

俺だけでそろえるには足りない兵も昭元の交渉のおかげでここま
でになった。

「だけど、欲は出してもいいと思うんだよね」

日が昇り始めたころ、二上山城を任されている柳生家蔵は時ならぬ声を聞いて飛び起きた。

確認するまでもなく、鬨の声である。

城が強襲を受けているということを即座に理解し、状況を確認する。

「何が起きている！」

「は、突如姿を現した敵勢による強襲で・・・」

「そんなことは分かっておる！敵の兵力は！？誰が率いている！？」

「は、は・・・混乱しているために情報が不確かではありますが、およそ1000ほどではないかと・・・敵将は不明ながら、丸に二つ引きの旗が」

「二つ引き・・・」

丸に二つ引きの家紋は將軍家、そしてその一族が持つ家紋である。今、家蔵の主である木沢長政とにらみ合っている細川晴元も同じ家紋である。

とするならば、この敵は細川の手の者であると考えるのが妥当だ。

「なんとしても城門を死守せよッ敵を本丸に近づけるな！」

ここで二上山城が墜ちれば自ずと木沢長政の進退も決する。兵糧も満足に補給できず、逃げのびる城すらなく、士気は低下する。それは避けねばならなかった。

一方もつとも気の抜けている時間帯を突然の強襲で突かれた守勢はあつという間に半ばまで突破されていた。

一箇所からではなく、同時にいくつかの方面から梯子がかかり、突入されていた。

それでも、元は畿内最強を豪語する木沢勢。ずいぶんと深くまで入り込まれはしたが、そこからじわじわと挽回を見せ始めた。

「押セッ押し切れッ！」

長槍が突き出され、矢が空を切り、剣戟の音が響き渡る。

やがて、怒号は霧散し、勝鬨の声が上がった。

城を守りきった木沢勢からである。

しかし、無事城を守りきったというのに、家蔵の顔は優れないまま、ますます厳しいものとなった。正体不明とも言ってよい敵を退けてからあがってくる報告の数々。それがなんとも拙い。攻め込まれた時間帯の問題もあるが、死傷者の数も問題であった。

はつきり言って想像以上の被害を受けた。城門は二基が完全に破壊され、使い物にならない。残りは一基のみでそこを越えられると本丸まで丸裸も同然だ。

さらに、大暴れしていた部隊のほかにも少数で動いていたものがあるらしい。

直接敵と戦っていない場所で突然何かが爆発し、周囲にいた兵が死傷するという事態が起きている。兵が寝泊りしている長屋に爆発物が放り込まれた跡は悲惨と言ってもよい惨状だったらしい。

しかもこれだけの被害お受けてなお、討ち取った敵兵は20に満たない。

形勢不利を悟った敵がいともあっさりと引き下がったからである。

「敵の目的は明白だ。わざわざ城門を破壊して去って行つたのだ。再び攻め寄せてくるんだろっ」

「たかだか1000の兵ですぞ！なにを恐れることがありまじょうか！」

「さよう。数はこちらが勝っております。家敵殿。ここは一つ打つて出るという手もあるではありませんかな」

「何をバカなことを。敵の全兵力がたかだか1000という保証はないだろっ。城の守りを固め、物見を出し、敵の様子を探るのが先だろっ」

家敵は戦の処理に加え、姿の見えない敵からの強襲によって浮き足立った城中を押さえることから始めなくてはならなかった。

しかし、軍議の場に出てくるような比較的高い位階のものですら、この状況に対応し切れていない。

- - - - -このままではまずい

家敵の背筋に氷塊が滑り落ちた。

せめて宗厳さえこの場にいてくれたなら、剣豪と称された息子さえいれば安心して戦を行えたのに。その宗厳は長政の部隊で剣を振るっている。

「とにかく、打って出る必要はない。守りを固め、負傷した者の手当てを優先するのだ」

其の十五（後書き）

階段から転げ落ちて腰を強打した坂川です。一緒にいた仲間は悶絶する私をおいて行ってしまいました。みなさん、凍った道など、くれぐれもお気をつけください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3239y/>

義輝伝 幕府再興物語

2012年1月14日22時10分発行